

實際生活に没交渉慣

空疎の人の状態と

○ 修 論

育上から與へられて居るので、生長しても其習慣は容易に改められぬ。そこで實際生活に没交渉な空疎な人は非常に多くなる。其の空疎の上に種々の立派な意思感情の宮殿樓閣を組立て、居る。これが當世の實狀のやうに思はれる。恰も幾百里の路を夢の如く經た旅客のやうな人が甚だ少く無い。此の多數の空疎な人が顧客であれば、商品はおのづから堅實を缺く。此の多數な空疎な人が相手であれば、工業は不親切になる。實際生活に空疎な人が顧客であれば、外觀のみが美で、實質は良く無い商品でも排斥されずに済む。實際生活に空疎な人の鑑賞を得るには、不親切な工藝品でも、其等の人の眼をさへ瞞過すれば、價の低いだけそれだけ歓迎される。社會の一切の不善不良はこゝより生ずる。

政事でも經濟でも何でも彼でも、實際生活に空疎な人の多いといふ事は、奸雄に甚だ好都合の状態である。建武中興の空疎な政治は、實際に通じて居た足利尊氏をして意を恣にするを得せしめたのであ

今人の通弊

る。主人も空疎、細君も空疎、官吏も空疎、議員も空疎といふやうになれば、國家の隆興などは、其の基礎が薄弱であるから望み難い。今や實際生活に空疎な人が次第に其の數を増して來て居はすまいか。空樽が轉がつたやうに歲月を經て居るも宜いが、一旦忽然として空谷に墜つるやうな時に遭ふのを免れ無といふ事が起りはすまいかと危ぶまれる。願はくは自他共に今少し實際生活に空疎ならぬやうに有り度い。ゴブラン織やセーブル陶器の名を知つて居て、自分の着て居る物の名も知らず、手にして居る湯呑の佳不佳も知らぬのが、今の人の通弊である。古くは釋迦基督より近くはオイケンやベルグソンの説を批評などしながら、夫は妻の扱ひ方を知らず、妻は夫の不機嫌を癒すことをも知らぬのが、今日の通弊ではあるまいか。今の教育を受けた者は、男女共に博大高遠な事を知つて居る。立派である、優美である。しかし砂糖屋の前を自働車で走つたのでは甘みは知れまい。實際生活に空疎で無いやうに日月を經なくては、

○ 生活の空實疏密

○修省論
意思も感情も脚下が危い。願はくは吾が言が過分要求で無くて有り
たい。一切の人々に今少し實際生活に就て空疎ならず日月を送つて
貰ひたく感ずる。

兩端

新陳

新即佳
といふ兩端を擧ぐるの語は、近頃始まつたことでは無いが、語は
甚だ多く人々に繰返される。そして新らしいといふことは佳良善美
のこののやうに取做され思做され、或は新即佳良善美といふやうに
取做され思做されざるまでも、新といふ標幟語の下には佳良善美と
いふことが包含されたり、若くは聯屬されたりして居るもの、やう
に感じて居る傾を有する人の少く無いことは世に見えてゐる。で、
其の反面には、陳といふことを不佳不善不良不美のやうに見てゐる
人もある。世上の半部、若くは過半部、若くは不足半部に、是の如
き傾の有ると同時に、他の半部、若くは過半部、若くは不足半部に
は、又翻つて新といふことを喜ばざる人々が在つて、そして新とい
ふ標幟語は恰も不良不佳不善不美を表して居るかの如く取做し思做

○兩端

陳即佳

○修 會 論
し、若くは然様感じて居る者のあるのを認める。是の如きは今日の世態に眼を閉ぢて居らぬもの、齊しく認むるところの事實である。新と不新とは今日の標幟語であると云つて宜しい。

時代には時代の標幟語

がある。閥族といひ、人民といふも亦今日の一の標幟語である。立憲的、非立憲的といふも亦今日の一の標幟語である。自然主義、享樂主義、奮闘努力主義、新浪漫的、理想主義などいふは、其の用ひらるゝ範圍のやゝ小なるも、亦今日の標幟語として數ふ可きものである。國家主義、個人主義といふのは數年前の標幟語であつた。衆議院開設前に於ては、自由と壓制と、民權と官權といふことが、時代の標幟語であつた。國粹保存と歐化主義とが標幟語とされたこともあつた。明治初期に於ては舊弊頑固といふと、文明開化といふとが、最も廣く用ひられた標幟語であつた。明治以前に於ては勤王

と佐幕と、公と武と、尊王攘夷と開港和親と、此等の語は將軍政治が 天皇御親政となる迄の間の沸騰した世に爛として輝く標幟として用ひられたことは今猶明らかに想見し得るのである。徳川氏強盛の時代は、公儀といふ語が一大標幟語であつて、公儀を畏れざる致方といふ一語の前には、如何なる理義も頭を擡げ得ることは無かつた。此に對して人民の味方たる標幟語は、渡世といふ語で、渡世の妨などといふ語には、町奉行も深厚の注意を拂はぬ譯には行か無かつたので、渡世といふのは猶今日の人權といふが如き威光ある標幟語であつた。徳川氏時期より遡つて鎌倉時期に至るまで、強烈な光を放つた標幟語は、武士の一分といふのであつた。それより猶古くより行はれた剛愎といふ語も、久しい間の壽を保つた標幟語であつた。徳政などいふ語は美名の下に恐ろしいことを行つた。南北朝頃に勤王といふ語歎尊皇といふ語が標幟語として存したならば、足利氏は或は意を得無かつたかも知らぬが、皇權回復を圖られたの

標幟語の如し
魔術師の呪詛

○修省論
さへ、天皇御謀叛など、云うて居られたのが、其の時代より遠からざる時のことと有つた。鎌倉以前に於ては優美といふのが蓋し標幟語であつたらしい。標幟語の歴史を叙することは姑く擱き、凡そ此等の標幟語は、これを學問的に評し、冷靜的に考ふる時は、大抵價値の低いものであつて、其の時代、其の邦土に於てこそ火の如く輝き、華香の如く薫するなれ、時隔たり土異にして之を觀すれば、恰も魔術師の呪詛の如きものであるのを其の常とする。攘夷尊王などといふ語は如何に當時の人々の胸の海に壯なる波を立てた語であらう。而して攘夷の實は何處に擧げられたらう。開港和親を敢てした徳川氏が政權を返上した後の對外政綱は何であつた。やはり徳川氏の執つた政綱に大差は無かつたでは無いか。攘夷の語はたゞ征夷大將軍に逼るに難題を以てしたに過ぎ無かつたでは無いか。尊王攘夷を主張した人々の手に政權が移つてからの所爲は何だつた、何の狀だつた。所謂

尊外卑内

標幟語の價値

の滔々たる氣風は、明治臺閣の諸公が造り出したものでは無いか。舊弊頑固を冷嘲し熱罵し、文明開化を賞揚し街誇した明治初期の人民は、疾くも攘夷の一語を耳後の風として終つて、翻つて外國人崇拜の習氣を做し出したでは無いか。攘夷の一語は有力であつたに相違ない。しかしそれは魔術師の呪詛であつたでは無からうか。最近の一例は護憲倒閣といふ標幟語の振廻されたことである。まことに結構千萬な道理千萬な語であつたが、政治界の消息に暗き子等が新聞紙等に頼つて僅に知るところでは、これも漸く將に魔術師の呪詛たらんとするを認める。標幟語は實に一時に威力を有して群衆を率ゐるの將帥であるが、其の價値はたゞ其の時と其の土によつて支持せられるものである。其の語の意味の眞價は標幟語たる否とによつて増減し無いことは勿論であるが、たゞ一時一邦の標幟語たる

○兩

端

○修 者 論

によつて、標幟の下に集まる群衆に命令するの猛威を揮ふのみである。而して此の標幟は、數々先天的盲從性格を有して居る者、即ち事大思想的傾向を有して居る者共、即ち何等の見識も議論も主張も有る無くして、たゞ徒に流行を追ひ世狀に隨ふを以て可なりとするところの、朝鮮に存せし事大黨の如き思想及び氣習を有せるところの者共を驅つて、種々の行爲を敢てせしむるもので、そして其の結果に至つては、假使不好の狀態に陥るとも、何人をして何等の責任をも負はず、また何人の同情をも寄せざらしむるものである。

新

といふことは今の標幟語である。そして新といふ文字の書かれた旗幟の下には人皆競ひ集まらんとしてゐる狀が有り、又一旗幟を立てんとするものは、皆競うて新の一字を染抜かむとしてゐる。其の狀恰も平家の世盛に天下盡く赤からんとした如き觀がある。新の流行

は殆ど頂點に達してゐる。で、新といふ語をさへ冠つてゐるものならば、何でも好いものゝやうに思ふ者さへ生じて、其の實は陳くて陳くて太倉の舊粟まさに風化して飛ばんと欲するやうなものまでが、新の一語を冠帽にして世に誇らんとして居るのである。元來

新なれば即可

といふ道理が何處にあるであらう。實に笑ふべき小兒賺しの標幟語である。新なるべきものゝ新なるは則佳である。新なるべきもの新なるが佳なるは、可なるもの即佳なのであつて、新即佳なので無い。鐵の用ひらるべきところに鐵の用ひらるゝのが可なればとて、一切の場合に鐵が可なりと限つては居らぬのである。新即佳といふが如き非論理的のことは、感情上には成立ち得るも、本來は有るべくも無い道理である。麥酒は新しきが佳であらう。然し其は新しかるべきものが新しきが故に佳なるので、新即佳では無い。又麥

酒の新しきが可なればとて、葡萄酒も新しきが可なりといふ理は無
い。もとより新即佳では無い。葡萄酒は麥酒と異にして、精品の古
なるもの却て佳である。さればとて葡萄酒は

古即佳

といふのも理に於て通じない。最新の麥酒なりとて、其醸造法と
醸造原料との魚惡なものが佳なる理は無いのと同様に、古い葡萄酒
なりとて、原料、醸法、保存法の悪い葡萄酒が佳なりといふ譯には
ならぬ。畢竟新即佳といふも、非理で不通のことである。古即佳と
いふも、また非理で不通のことである。病に對して投せらるゝ藥が、
新藥ならば即可といふ道理も無く、舊藥ならば即不可といふ道理も
無い。新藥の其の聲價を失うて漸く世に遺らるゝものは決して少く
無い。舊藥の永く杏林に信せられて、今猶其の効を見して居るもの
も決して少く無い。もとより日新又日新は何時の世でも同じである、

新も即佳
らも即佳
な

尙古の陋

今はじまつたことでは無い。三千年も昔から其様なことは言ひ古さ
れてゐるのであるが、其の日新の世であつて見れば、古の未だ之有
らざりしものが今新に世に出づるに至るは必然のこと、そして又
世界進歩の法則上、もとより然るべきことである。然ればとて新即
佳といふ道理が何處にも無いのは、古即佳といふ道理が何處にも無
いと同じことである。たゞ時代の風潮に南北あり進退あつて、或
時は古が尙ばれ、或時は新が尙ばれるのである。尙古の盛であつた
時もあるが、尙古の弊は姑く措いて論せざるも、古の尙ぶに足らざ
るやもとより論無しである。若古の尙ぶべきあらば、其は古なるが
故に尙ぶべきにあらずして、何等かの妙趣佳處の愛すべき處重んず
べき處あるが故に尙ぶべきものなのである。古なれば尙ぶべしとい
ふのは骨董家の見である。許由の耳垢、生啜の馬糞をば、古なれば
とて尙ぶべき理が何處にあらう。然し古を尙ぶの風潮のときに在つ
ては、古錢古器古俗古法を尙ぶの俗をなして終には古即佳といふや

○修省論
うな感が一世を支配し、何等賞愛すべきところ無きものをも尚ぶやうになる。今日猶此の尙古といふ標幟語の下に據つて、甘泉宮の鋸屑、達磨大師が睨んだ壁の土といふが如きものを貴重して居る一黨もある。其の陋はもとより一笑にも値しない。しかし是の如き尙古の風潮の盛なりし時に於ては、今より之を觀れば、陋愚無極の事も猶且道理なるかの如く取做され看做されて、幾分の同臭者と隨逐往來しあふことを得たのである。

政治上の尙古主義

政治上的の尙古主義の永續の如きは、元來甚しき不達見不徹定の談である。併し其主義の行はれてゐたことは、日本及支那に於ては如何に長いことであつたらう。今は既に其の影を潛めて居るけれども、而も予の如き者の眼には、猶死灰殘燼、風を得ば則ち燃えんと欲するものゝ存在することゝを認める。是の如き尙古の傾向は今や漸やく衰へて、一圖に新を欲

新古は正
邪善惡は
不可と
別なり

することは、今日の風潮である。尙古の既に陋なるが如く、尙新もまた妄である。新即佳の理は何處にも無いからである。惡は除くべしである、善は取るべしである。新の故をもて惡が善であるべくも無く、古の故を以て善が惡であるべくも無い。不可は自からは不可であり、新古は自からは是新古である。正邪は自からは是正邪であり、新古は自からは是新古である。新古はたゞ時にかゝるのみである。善惡可否正邪とは自からは是別である。新即可なるが如くに言は、言ふ者理に達せざるのである。然らずんば強ひて人を欺くのみである。小兒を賺して黄葉を黄金なりとするのである。千年萬年日月懸る、日月古なりと雖も何ぞ厭くを得ん。五月六月蚊蚋生ず、蚊蚋新なりと雖も豈誰か悦ばんやである。

尙古尙新皆俱に非

である。可なるもの可なるのみ、新古にあづかるにあらざる也

○修者論
ある。達人の陳を去り新を主とすといふのは、陳の不可なるを去り、
新の可なるを主とするのである。故に陳を去るといふと雖も、達人
は猶古の可なるものを取るものである。新を主とするといへども達人
は新の不可なるを去るのである。眼上に魚鱗を被ざるものは、新古
の二語に矮人觀場の痴をなす勿れである。況んや又

昨の新は今の陳

凡人の
となす者
古から
無し
である。如何に飛んでも落ちる地の上である。人間の爲すところ、
新ならざること久しい哉である。燕石を抱いて壁となせる者の古譬
喩の如く、平凡の才、庸常の資を有せる者の、自から見て以て新と
なせるもの、如きは、大抵古からざる無きものである。人須らく新
古を以て吾が標幟となさず、正邪善惡不可理不理等を以て標幟と
して之に従ふべきである。其の方が蓋し大過無きに庶幾からんであ
る。

三 毒

古の所謂三毒

貪瞋癡毒

は貪瞋癡をいふので、今更これを事新しく言ふまでも無い。實に
貪と瞋と癡との、人に取つて大毒たる可きは分明である。世上の紛
紛人間の擾々、いづれか貪瞋癡毒の爲すところならざらむやで、此
の三者を除き得ば、黄河水清うして、世た々太平ならんであるが、
如何にしても貪心は熾んに、瞋心は燃えたち、癡心は滞り留まるの
で、千萬年來業風蓬々たるのである。併し今こゝに古佛教の三毒の
説を繰返して、備貪る勿れ、備瞋る勿れ、備癡なる勿れなど言は
うとするのでは無い。却つて試みに

今の三毒

の是の如きものであるといふことを提起して、そして世人に問は

○修省論

うとするのである。今は猶古のごとし、古は猶今のごとしである。人間が二代三代で然様變るものではないから、今は古の比では無いといふのは、實は今人の自惚である。古は今の比では無いといふのは、實は古を好む人の迷想である。古の人だつて然様愚味のみでは無からうから、今の人が古には無い問題のやうに思つてゐることも、實は幾百年前から問題になつて居ぬとも限らぬ。又今だつて必らずしも古に劣る譯は無いから、古には是の如きものがあつたが、今は此に及ぶことが難いと云はずとも、案外に今の方が古に勝り得ることも有るものである。であるから、今事新しげに予が今の三毒を提起したとて、そんな事は疾の昔から存在して居ると云はるれば、それまでの事であるのである。古猶今の如し、今猶古の如しである。奇言も新説も有るわけは無い。たゞし今の三毒の是の如きもので有ると云ひて、提起しようとするのは何であるかと云へば、予は

壯毒老毒自覺毒

であると思はうと思つて居るのである。此中に老毒は毒の最も明らかなるものであつて、そして力の有るものである。人が爲ること做すこと言ふこと思ふこと、皆前轍往軌に拘泥して、兎角に古いことを好むのは、老毒の廻つて居る證據である。活潑新鮮の光景も工夫も無く、たゞ無事無難主義に傾くのも老毒の廻つた證據である。酒あれども肯て飲まずに、びく／＼して居るなども老毒の廻つたのである。前途の見込ばかりを大切に、當然の理で動くことを輕んずるなども老毒の所爲である。貯金思想が旺盛になるのなどは、老毒の廻り加減も甚しいものである。生命保険の加入者になる頃か、世人は漸く老毒に侵されて、吾が子の嫁を求め、吾が女の婿を求むる頃になれば、大分に毒が廻つたのである。自分の墓地を買つたり、石碑の注文をして置いたりするやうになれば、毒の廻りも絶

頂で、とても助からないのである。教會に獻金したり、寺院や公共事業慈善事業等に棄資したり助力したりするやうになるのは、上品な老毒の廻り方で、禿頭に香水をふりかけて、七ツ下りの雨の如くに已まず、雪の上の日光の如くに、眞は冷やかにしてしかも輝く遊蕩をするのなどは、老毒の下品に廻つたもので、爵位が欲しくなつたりなどとするのも、老毒の廻つた一症状と見える。又酔客の酔はざるを粧ふが如くに、老毒の未だ廻らざるを粧うて、しきりに事業の手を擡げたり、刻苦勉勵して夙興夜寐の堅い行儀に若い者をおびやかす、年寄の冷水摩擦や、臍で煙草を吸つた詰間の藝とまでは行かぬ腹式呼吸などをするのは、老毒作用の變形である。悴の爲に良師を優遇して延くこともせぬ癖に、萬金を投じて骨董品を買取つて高尙ぶつたり、流行せぬものは好いものでも買はずに、流行見なら愚作悪畫でも高價を拂つて求める所謂「落款買」と稱する湯灌場買の向側に立つやうな書畫好や、園藝、盆栽、茶湯、香、謠、唄、

老毒の作用の變形

淨瑠璃、碁、將棋、釣、網、獸獵、書道畫技、篆刻樂燒、蒐集道樂神たゝき、佛いぢり、易占信仰等に耽るのやは、皆老毒の廻つた證である。

老毒

の廻つた症状の最も明らかなのは、妙に陰性に高慢なることである。世話焼、干渉すきになることである。事物の解釋を自分で取り極めて、異解を容れぬことである。何でも良い事の專賣權は自分の所有の如く感じて居ることである。其癖に大膽な行爲を取ることとを避くる傾向の有るとである。戦闘線へ身を挺して出ることとを好まぬ傾向のあることである。凡そ此等の状を具して居て、そして何等かの嗜好を有して居たなら、其の嗜好の性質如何を考へると、老毒の廻り工合如何は、明瞭に測定することが出来る。文武官吏及び教育家は、年齢に關せず比較的早く老毒が廻る。富者は貧乏人より早く老毒

老毒浸染の症状

○修 會 論

が廻る。酒を飲まぬ者は酒客より早く老毒が廻る。配偶を有するものは孤獨者より早く老毒が廻る。旅行をせぬ者は旅行を數々する者より早く老毒が廻る。凡そ此等の老毒の廻つた者は、皆小やかましく邪見慳貪で、消極思想のみ強くて、自尊で、剛愎で、理想の假面の下に實利主義を潜ませて居て、利息算を忘れぬ程度に於て仁惠的で、無邪氣といふことを最愚の行爲と見做すやうな傾向を帯びて、忠君愛國を自己の私有物の如く振廻して、一切に於て活潑流利無邪無意識的の情狀を缺いて居る。是の如き老毒の廻つた人物のみ多くなれば、商店は必ず衰敗し、國家事業は必ず退萎し、一家は活氣を失ひ、一國は元氣を失ひ、心線の古くなつた電燈球のやうに暗くて華やかならぬ狀をあらはすに至るものである。しかし老毒患者は、多くは好歴史を有して、そして社會に於ける優地位を占めて居るものであるから、一概に之を排斥することも成らぬものであるが、ただ之を消毒することを忘れてはならぬ。十分に其の老毒を消毒して

壯毒患者
の症狀

後之を利用することになければならぬ。又自個一分で論ずる時は、自己が若し老毒の爲に漸く侵されんとして居ることを悟つたならば、速かに其の毒を拂去らねばならぬ。

壯 毒

は向ふ行の強い二十歳前後の者に存するの毒である。戀愛に陥つたり、それに關聯して無準備の哲學的思索に陥つたり、或は誇大妄想狂の第一學年生活となつて、非力の大太刀、振廻しもならぬ大問題を抱き廻り、人生の歸趣如何などと、偉さうなことを捻り散し、高價な物の價を問へば偉くでもあるやうな下らぬ感に内實は操られて、とぼけた大問題のみを心頭口頭にすること、癡者が雪舟や啓書記を三圓か五圓で購ひたがるが如くなるなどは、皆壯毒の逆上が然らしむるのである。其の最も下らぬのになると、兎に角教師ともあるものを苦めるのを面白がつたり、同盟罷工のやうな多數を待むでの脅

○修 省 論
迫的行爲の如きを面白がつたり、野心政治家の暗示を受けて、石投げ役、棒振り役などを擔當して、一廉好い役者になつた氣で、虹の如きと云ひたいが、煙草の吸殻位の氣を吐いて誇り、或は又酒に溺れ色に狂する類、或は又文學者が詩人がる類、或は又業は古人に毫も似て居ぬが、奇行だけは似て居るなどといふ模造畸人になつたりする類、或は又無暗に成功熱に浮されて、一攫萬金宗の信徒となる類、これ皆壯毒の然らしむるのである。

自覺毒

○修 省 論
の廻つた者は、男女に限らず皆むづかしい病症の象徴として、遠慮や斟酌の少い、我儘發揮は本來の面目なるかの如き面構をなし、いろは短歌のの字を見て大悟徹底したといふやうな行方、神にも佛にも此方から暇を遣つて、ツンとして鼻の端で人込を押分ける料簡のすさまじさ、先づ近處の衆や親類の者をして、其譚語に中てら

自覺毒患者

自覺毒患者
は香末路の
だし殼茶の

れて、此の熱の高さではと首を捻らしむるのが常である。併し根が毒のさせることなれば、四五年立つ内には毒氣おのづから去るに随ひ、番茶のだし殼のやうな者になつて終つて、何處ぞの隅に穩やかな日を送るやうになることは疑無けれども、差當つてのところは、慈覺大師も及ばぬ自覺大師の威儀烈々、自覺大師の意氣の凄じさ、大薩摩を黄色く塗つたやうな聲を四方に廣宣流布せらるゝのであるから、随分舊式の臺所では味噌瓶が破れたり漬物が變つたりする筈である。此の毒の廻つた者の畢竟落着するところは、矢張り本の奎阿彌にして、猿が脱いだる猿の面、さしたることも無くて已むのであるが、熱の高きを以て四圍を驚かし、大屋の佐次兵衛に、餘計な苦勞をさするなどが特點である。當世の三毒、豈今のみならんや、昔もまた是の如き毒に侵された者は、瀬川の子子の如く多かつたに相違無いが、時世時勢で鬚の結振といふ句の如く、世態おのづから變じて、種々様々になつて來たので、今のみ是の如き毒に侵さるゝ

○修 省 論
者の多きが如く見ゆるに至つたのである。不思議も何も無いことである。

同生活の昇降

生 活

易は生活の難
するのみに
存に

は自存の事實である、現前の事實である、難いことも何も無い、おのづからにして既にこゝに存して居ることである。生活難を口にしても、さういふことを口にしないで居る間は、既に明白に生活してゐるのである。難易は人に在つて、生活其物には無い。重量十貫の物を擔ふのに、其難易は人によりて生ずる差異で、物は常にたゞ十貫であるが、劣者は之を負擔するを難しとし、勝者はこれを負擔するを易しとするが如きである。物に輕重は無い、事にも難易は無い、輕重は人の認むるより生じて、重しとする者が之を擔ふを難しとし、輕しとする者が之を擔ふを易しとするのである。

生活の難易

○同生活の昇降

生活と生
活能力と

小兒には
重き物多し

○修 者 論
が或程度までは社會の狀態より生ずることは疑を容れ無い。併し社會は元來個人々々の集合より成立してゐる者であるから、社會の狀態が吾が生活を難からしめ、或は易からしむるといふことが眞實にせよ、個人の生活の難易は、大半以上、個人の生活の能力如何に本づいてゐるので、生活能力が高くさへあれば、何の時も生活難を訴へずとも濟む譯である。之に反して生活を支持する能力が低微なれば、何の時も生活難を歎せずには居られぬ譯である。それ故に生活の難易を云々するは、其の大部分は個人の生活能力を表示する語として聞いて差支無い。即ち生活難を口にする人は、自己の生活能力の低微なることを表示するので、恰も臂力の微弱なる人が、物を重しといふことと同じ様であり、小兒や婦人に取つては重き物が世に甚だ多く存すると同じ理である。されば、世に若し生活難を絶叫し悲號す可き人があらば、それは寧ろ個人では無く、一國の經濟を司管し、民庶の幸福を企圖するを念とするところの爲政者、人主、

乞者の泣
言

宗教家等であらねばならぬので、個人としては生活難など口にするは、所謂「物貰ひの泣言」たるの醜を免れぬのである。

勇士は戦を苦とせず

二重三重
の生活難

そこで普通の意味に於て言ふところの生活難の事は今之を論せぬが、個人の生活の難易は、決して個人の生活能力の高低如何のみに止まらずして、猶其の上に幾重にも生活の難易を生せしむるものがある。世人の多数は、物質的供給の満足を得る場合を以て生活易とし、然らざる場合を以て生活難とするのであるが、物質供給の満足不足は、生活といふことに對する最切最近の一條件には相違無いけれど、生活の全面は物質關係のみで掩ひ盡さるゝものでは無い。生活難は二重にも三重にも存するのである。

社會一般の生活狀態の昇降

○同生活の昇降

同じ生活
の昇降
する
実例
の

○修 論

は、直接には何等の個人を苦ましむるもの無けれども、しかも間接には甚大甚深の力を以て個人を苦ましむるものである。たとへばこゝに一人ありて、相應の収入を有し、他人に依らずして衣食し居ると假定する。而して其の衣は一家族と共に、夏は何、冬は何、禮儀の場合には夏は何、冬は何、其の食は一家族と共に、朝は一汁、晝は一菜、夜は二菜といふが如くに概定さるゝとする。然る時は其の収入にして變せず、其の物價にして甚しく高下せず、其の習慣にして破れざる以上は、安寧清和の幸福な生活を營み續け得る譯である。然し其の一家は、永久に同様同程度の生活を爲し居るとしても、社會の一般の生活状態が高度に昇騰して、其の家の人々の被服が、數年前には中等階級の人の被服として社會に認められたものであつたに關らず、今では下等階級の人の被服として認めらるゝに至つたとする場合には、すなはち其の家の人々が、社會に於ける自分等の地位相應の體面を保たんとするに於ては、在來に比して多額の金を

無變化の
變化

費して高價の被服を購買し、之を着用せざる可からざるの事情に遭遇するを餘儀無くされてゐるのである。飲食にしても同様で、社會の一般が奢侈になれば、以前は中等階級の食品であつたものが、今は下等階級の食品となるといふやうな事情が生じ、随つて中等階級の體面を保たんとするに於ては、從來に比して高價なる食料を取らなければならぬことになる。如上の場合に、猶舊慣を追うて敢て變更すること無く日を送るとすると、畢竟幾許の壓迫を感せずには居ぬ譯になる。即ち社會一般の生活状態の昇騰の爲に、何等異動を生ぜざる者がおのづからにして生活の難きを覺えしめらるゝといふ事になる。個人の自己の能力には變異を生ぜざるも、社會の風潮の爲に生活難を受けしめらるゝのである。物質上の力に於ては之に堪ふるにせよ、少くも其の個人の趣味や主張や意見に於て、一の難儀を感ずる譯になるのである。袖でよろしいと感じ、若くは主張して居てそれで宜かつたものが、同列者が皆奢侈になつて羽二重を着る時

○同生活の昇降

社會と歩
む生活

○修者論
勢になれば、細を脱して羽二重を用ひなければならぬやうに感せらるゝに至るのが人間の實情である。人力車のゴム輪が生ずれば、ゴム輪を用ひぬ車に乗つて居ては、一等を下るやうになる道理である。吾妻幌が流行すれば、吾妻幌にあらざる幌を用ひて居ては、猶且一等を下つたやうな形になる。小例を擧ぐれば右の如くであるが、何によらず社會が一般に其の生活状態を高めて來れば、在來同様の生活をして居るものは、一種の生活難に遭遇するのである。即

社會と歩調を同じくして生活する

といふことは、個人が社會に存在して行く以上は、一種の鐵規であつて、其の鐵規の下に、多少の難儀でも窮屈でも不満でも何でも忍ばねばならぬのは、今の實際である。これも若し社會一般の生活状態が昇つて行かぬ時、若くは低下して行く時は、然までにはあるまいが、社會が甚しく奢侈になり行く時などは、甚しい異つた感觸

を個人に與ふるに疑無い。

乃木將軍

の如き人が、二十年前と二十年後に、同一精神、同一趣味、同一状態を以て生活したと假定すると、前には別に生活の難を覺えざるも、後には餘程強い反抗心や自信や執着力を發揮せざる以上は、前と同様の生活状態を繼續して行くことは難いことになるのである。此の意味に於て、個人の生活は、社會一般の生活状態の昇降と共に昇降して行き勝つたもので、若し之に反する時は一種の難儀を各個人は感ずること無しには有り得ぬ道理である。そこで一個人は何等變動なき生活を繼續して居ても、社會の生活状態の昇降によつて、

社會に對する
自己の反抗
心と執着力

或は降級生活を爲し或は昇級生活を爲す

○同生活の昇降

ことになる、社會が奢侈になつて行く時は、或人はおのづからして階級を降つた生活を爲すことになる。社會が質素になつて行く時は、前と同様の生活をしてゐても、全體との映り合の上から、或者は昇級した生活をするようになる。今日の實業界の状態では、若人あつて、數年前若くは十數年前と同一狀の生活を持続するとすれば、明らかに其の人は降級生活をして居ることになる。實にこれもまた生活の一難である。奢侈は文明では無い。しかし文明は奢侈を生ずるに疑無い。質素は野蠻では無い。しかし質素は野蠻に近く見える。生活の眞の眞義より言へば、今日の幾多の文明的設備が左程價値あるものでは有るまいが、それでも河水は逆流せず、今日既に是の如くなる文明の各般設備が成就した以上は、今更電燈水道を廢して、ランプ車井戸の昔時に反することは出来無い。そこで個人には生活の昇級降級が生じて、守舊者は降級生活を營み、就新者は非降級生活を營むことになる。誰しも降級生活を營むのは悦ば無いから、終に

質素と奢侈と

舉世滔々奢侈の威焰を揚ぐることになるのである。個人の生活とは云へ、個人の生活もまた個人の自由のみには有り得無い傾が見える。一般生活は儘に昇つて来て居る。日本人の生活は、歐米人の生活に追隨し果すまでは、猶昇つて行くことであらう。しかし是の如き状態より生ずる生活難に囚へられて、そして煩悶や焦慮をすることは、賢いことであらうか、愚かな事であらうか。換言すれば、多數の壓迫を蒙つて、自己の意志や趣味や思想の自由を犠牲にして行かなければならぬといふことは有るまいでは無いか。今日の一般人の生活状態の昇騰は、儘に日本の健實なる中等人士を壓迫して居ると感せずには居られぬ。降級生活に就くのは厭ふべきであるが、しかし降級生活に就かねばならぬやうな實情が既に吾人の四圍には逼つて居るのだらうか。國民は生活に就て一大覺醒を要する時機に際して居ると考へられる。

無意識の壓迫

人は生物の長である

されば吾人は何等の壓迫を被らぬ可き筈である。換言すれば、「誰か汝を壓迫する」といふ一語を下せば、たとひ壓迫を被るの状あるとも百狀千態一時に瓦解融する譯である。然し又吾人はおのづからにして何等かの壓迫を被らずには居ぬのである。物質の規則は既に定められて居るのである。火熱氷冷、古より然りて、吾人は之を如何ともする能はざるのであるから、劫初以來、吾人の意志は無限自由を欲して居るけれども、無限自由を實現し得たことは無くて、物質規則の内、蠢動して居るのが吾人の實際状態である、換言すれば、「いづくに汝ありや、汝たゞ天に壓し地に迫られて存するのみ。」といふ一辭に遭へば、唯々として叩頭するより他は無ないのである。

人は自由を得たることを無し

自然の鐵規なるは智受ならずや

是の如き大づかみの根本の談は今之を敢てする積りで無い。然し吾人が禽獸蟲魚に比して大自由を有して居るに關らず、不斷の壓迫(實は壓迫では無いにもせよ)を宇宙より被つて居ることは争はれ無い。それは姑らく擱くにして、吾人々類相互の間に於ても、吾人は壓迫を被らずは居ない。宇宙の壓迫、たとへば自然の物質界の規則の壓迫の如きは、平等に吾人の頭上を蓋ひ身邊に纏繞して居るのだから諦觀の方如何によつては之を無視することも出来る。白髮は何人にも来る。年齢の租税は天子にも課せられる。で、これも有難く無い壓迫には相違無いが、何とも致し方は無い。たゞそれが公平無私に人類全般に來るもので有るから、壓迫を感じ無い譯では無いが之に對して反抗や忿恨や憎悪や不服や争鬭の感までは起すに至らずして已むを得るのである、或は又壓迫さるゝといふ感を超脱して、之を甘受するを智なりとするの意見をさへ抱き得るのである。

然るに人類相互の間に於て、甲者が乙者を壓迫し、丙者が丁者を

○無意識の壓迫

壓迫者の少量の快感と
被壓者の多量の不快

○修論

壓迫するといふ事になれば、壓迫するものは少量の快感を得るかも知らぬが、壓迫されるものは多量の不快を感せずには居無い。眞の壓迫の感はこのに至つて生ずるのである。不平や、反抗や、争闘や憤怒や、嫉悪や、種々の不善の感情と事相とは、こゝに於て生ぜずには居無いのである。
古印度に於て婆羅門種や刹帝利種が社會の優者たる可き權利を有して居た當時の、劣者たる旃陀羅種などは、如何に

恐ろしい壓迫

を感じて居たことで有らう。源平氏以前に於ける日本に在つて、公卿が社會の上級を占めて、宰として抜く可からざる感をなして居つた頃の武士たるものは、如何に其の壓迫を感じて居た事であらう。近頃まで武士が其の兩刀の威によつて、四民の上位に居た時の、百姓町人たるものは、如何に其の恐ろしい壓迫を感じて居た事であらう。

不平、反抗、憎悪、忿怒、争闘、暴發

う。凡そ此等の階級制度が社會に存して居た時に當つては、下級の人民は、蓋し其の頭に鉛の冠を戴かせられて、其の脚に石の履を穿たせられたやうな感を有せずには居なかつた事であらう。そこで其等の不自然不平等な人為的であり有意的である壓迫に對しては、必然の情勢として不平が堆積される、反抗心が養成される、憎悪や忿恨や嫉妬やが増長される。終に暴發する。争闘が開かれる。舊習と、天運と、實力との錯綜した發現によつて、種々の状態をなすには相違無いが、兎に角に舊觀を破つて碎いて、そして

新らしい世界

が建立されるに至るのである。佛教の興起は、階級制度の無視といふことを、背後の力にして居るとも解釋し得るのである。武士の崛起は、公卿の壓迫を擺脫したのだ、とも考へ得るのである。自由民權の説が、野を焼く火の如き勢で明治に起つたのも、人民が有司

○無意識の壓迫

○修 省 論
の壓迫の下に長く蟄して居た不平の爆發だ、と解しても解し得るのである。凡人爲的の有意的の壓迫に對しては、必定其の反動が惹起される。これは人の自然の情が壓迫を厭ひ、自由を欲するより生ずる必然の勢である。これ等の事は今之を細説するを欲せぬ。たゞ

意識的壓迫は輕減

されるに傾いてゐるのが今日の狀態である。人は舊夢を繰返さぬ。人智は既に進んで居る。故意に他を壓迫して、そして自我の存在を鞏固にしたり、繁榮を増進したりせんとするが如き思想は、漸くにして古い思想となつて終つた。今の聰明なる人々は、決して古の雄豪なる人々の如くに、他を壓して己を寛にしたり、他人の土地を深い塹壕溝渠にして、そしておのれの城を高くするやうなことを、智あることゝは思つて居らぬやうになつて居る。即ち意識して壓迫を他に加ふる如き事は智者の爲さざるところとなつて居る。官僚的頭

今の聰明なる人との士と

人の壓迫の減少

宗教の壓迫の減少

政治の壓迫

腦に傾いて居るものでも、古の威壓主義を以て世に臨まんとするものは少くなつて居る。であるから自然に吾人が人類相互の間より壓迫を被るといふことは減少されて居るのである。宗教は随分吾人を壓迫したものであるが、今日の日本の吾人が宗教の壓迫を被るとは甚だ少くなつて居る。政治上の壓迫は猶輕減されては居ぬが、それも其の壓迫を擺脫す可き徑路は、漸次に開拓されつゝある。今の政治は、人類が無益の壓迫を被ることを極はむとするを以て其の要義の一とすべきことを是認して居るに近い。文學美術は無論何等の壓迫をも受付けぬに傾いて來て居る。思想界は絶對の服従を強ふるが如き「神の意志」「佛陀の聖量智」等に就ても、其の無上權を揮はしむることに左袒のみは敢てせぬやうになつて居る。凡そ是等の諸點に於て、其の弊もまた發生し存在することを免れぬのでは有るが、要するに吾人が或壓迫を被るといふことの漸減されて居るのは事實である。

○無意識の壓迫

○修 論
是の如く諸種の壓迫が漸次に輕減されて行く世に在つて、漸くに
して生じて來たものは

無意識の壓迫

である。人為的で無く、故意的で無く、迷信的で無く、武力的で
無く、自然にして世態の變化と共に生じて來たところの壓迫である。
勿論此の無意識的の壓迫と云つても、決して今代に於て忽生したの
では無く、遠い古昔より存在したものは相違無いが、器世間文明、
即ち物質的文明の急進によつて、著しく吾人を壓迫するやうになつ
て來たのであつて、其の壓迫力は日に月に増進し、恰も古史上の暴
虐の君主や、卓出した教主が、他を壓したるが如くに、吾人人類の
或部分を壓迫せんとする傾が有ることは、漸くにして吾人の心頭及
び眼前に明瞭に映出して來たのである。
稲の穂を扱く道具の世に現はれたのは、未だ詳しくは考へぬが徳

物質文明の急進に
起つて來た
無意識的
壓迫

寡婦倒し

川氏の中世以後で有らう。今これを稲扱と稱して便利有效の器具と
して居るが、實に稲扱の便利な器具たることは争ふ可くも無い。然
し此の稲扱を、一名「寡婦倒し」とも呼んで居る。其の名の由つて
來るところは、稲の穂を扱く如きことは、寒酸依るところ無き寡婦
などの手業であつたのに、此の器一たび出で、功を爲すこと迅速で
あるために、人が皆之を用ゐるに至つて、そして寡婦が其の頼り無
き生命を保つところの業を奪はるゝに及んだからして興へられた名
なのである。もとより此の事は一瑣事で多くを談るに値せぬのであ
る。然し物質的文明の進歩は、皆農場の主人を利用して寡婦の業を奪
ふ類である。器械といふ器械は、比々皆是「寡婦倒し」で無いのは
無いのである。何によらず生産額は増加して來たで有らう、生産品
は精巧にもなつたであらう。然し憫む可き寡婦と同様なる細民は、
日日夜々に其の壓迫を被つて、或は驅逐され、或は絞搾され、終に
其の生を樂むを得ざるに至り、文明の犠牲、若くは奢侈の犠牲と爲

○無意識の壓迫

文明の犠
牲

茜草栽培
紅花栽培
印度藍

○修 音 論
つて、社會の表面に絢爛煥乎たる文明の火を輝かす爲の薪片となり
炭塊となり灰燼となるに止まるのであらう。
是の如き結果は、誰人が其の意思より生ぜしめたといふのでは無
い。又誰人が意識して、如是の壓迫を如是の人類に被らせようとし
たのでも無い。新しい染料や、コールタール利用の研究よりコール
タール顔料が世に出で、歐羅巴の茜草栽培の農業は終に廢せんと
するに至り、日本の紅花栽培の農業も漸次に衰廢せんとして居る。
印度藍の産出も今日では夥多であるが、終に衰廢の日が來らぬとは
思惟し得ぬ。此等の新顔料の製出者が、舊顔料の産出者を壓迫せん
とする意志を有したか否は不明であるが、少くとも文明の進歩が或
壓迫を或部分に與へることは事實である。一國に於て飛空船飛行機
が成立せば、之を有せざる國は、其の缺陷の爲に壓迫を被るから、
昨日までは不急の事であつたことも、今日は急切の問題となつて、
之に應ずることを爲さねばならぬ譯になる。扱之に應酬して世に相

飛空船飛
行機の爲
増税

宇内の大
勢の結果

後れざらむことを力むれば、何も知らずに居ても其の國の人民は租
税の幾分を増して、そして飛空船飛行機の建設を支へねばならぬ。
即ち其の壓迫を被るのである。紡績機の發達は村落からブーン／＼
の紡車の響を奪ひ、ジャカード其他の織機の發達は、トンパタリの
高機や低機の音を婦女子の手から振ぎ取つて終ふ。一切の事象は皆
是の如くに推移して行くのが、避け難き今日の宇内の大勢である。
そこで或器械や或企畫の創始者や遂行者は、他を壓迫せんとするこ
とを意識してか意識せずしてかは知らぬが、無意識的に或壓迫を或
部分の上に襲ひかゝらせるに至る事は、已むを得ざる事實として世
に現はるゝのである。
是の如き世狀の推移は、資本者に利益し、富者に利益し、有力團
體に利益して、其の反對に無資本者を傷害し、貧者を傷害し、微力
の個人を傷害するといふことも、亦是已み難き勢である。大にして
論すれば貧弱の國家を傷害し、富強の國家を利益し、低能の種族の

○無意識の壓迫

今の文明の威力

文明に對する反感

○修省論

三三

人民を傷害し、高才の種族の人民を利益するといふ事も、已み難き勢である。古昔は北狄が文明の支那を苦め、ゴールが羅馬を攻めた事も有らうが、今日以後は蓋し野蠻人民は文明人民の文明の火を輝かす燃料となるに過ぎぬで有らう。然し是の如き宇内の狀勢が引續く間には、邦は邦の内、種族は種族の間で、個人は個人の中で、其の壓迫を感じて、之を憎惡し、之を怨嗟し、之を咒咀し、終には之に反抗せんとするの感情意志を生じ、自體の内にて反噬破壊の運動を開始せんとするの傾向を生ぜずには居難い。

無意識の威力の壓迫では有るが、富者に提供された

自働車の犖猛なる響

が、自働車に乗ること無き貧者の耳には悦ばしく傳へらるゝ情理は無い。自働車に乗らぬ者も道路の修繕には少額ながら負擔を敢てして居て、そして自己等と没交渉な自働車の爲に驅逐さるゝ如き境

社會の劣弱者の憤慨

遇に立つことは、其の心理上に決して好良な情態を呈す可くも無い。建築が進歩して高樓が成るのは非難すべくは無い。然し文明は富者に味方して、其の居宅や事務室を宏壯雄大に便利快濶にすると同時に、其の附近に住居せる貧弱者は、光線の明朗と空氣の流通とを蝕ひ取られて、陰鬱な状態に日常生活を敢てせねばならぬやうになる。それが無意識の壓迫を被つた人等にとつて精神上に如何様な反應をなすで有らうか。此等物質文明より生ずる無意識的壓迫が、人の心靈上に及ぼす作用は、今こそ猶未だ多大ならざれば、積り累つては恐る可く警む可きものを世に將來するに疑無い。今たゞ一二の小例を擧げたに過ぎぬが、社會に於ける無意識の壓迫が漸次に強大になり來りつゝ有ることは、既に漸次に世の人々の心眼に映じ來りつゝあるのである。此等の壓迫を被る者の心理上の狀態は、何等かの結果を事實として世に現はさずには止むまい。先進諸國に於けるが如く、我が邦にもまた漸く各種の現象を呈し來るであらう。此は蓋し已む

○無意識の壓迫

三三

○修者論
可からざるの勢であるが、然もまた十二分の注意を拂ふ可き事であらう。

自然的の齟齬

人事の複雑と世相の紛糾

人事は複雑で、世相は紛糾して居るものである。そこで甲乙丙丁の間には衝突も生ずれば争闘も生じ、親和も生ずれば融合も生じ、相生相剋の種々の状態を生ずるのは、必然の數でもあれば、前定の理でもある。際離と反撥と混亂と雜糅との如きは、人事の經濟から言へば、勿論之を避けたい事であるが、また數と理との上からは如何ともし難いもので、此等の事の生ずるのを、絶無ならしめようと云ふことは、社會の各人が悉く卓越した洞察力と透徹した判釋力と之に加ふるに温かい美しい感情とを有するに至らねば、畢竟出來ないことである。それ故に今日の社會では、たとひ無益であるにしても、甲乙丙丁乃至庚辛壬癸の間に、衝突や争闘の生ずるのも、已むを得ぬことであるとせねばならぬし、そして又二者の意見や感情の

衝突争闘
は已むを得ず

○自然的の齟齬

衝突争闘
より生ず
る妙作用

○修 省 論
相異から、相攻撃し相剋殺して、而して後に妙作用妙結果の生ずることも有るとして認めぬ譯にはならぬ場合もあるのである。で、個人は個人と戦ひ、團體は團體と争ひ、國家は國家と敵して、随分其の爲には惨苦な状態を呈するに至ることが有つても、一概に平和をのみ希望して、曲從善屈を是とするといふ譯にはゆかぬのである。時には不利益は著明であるにしても、争闘を是認して、衝突を可なりとせねばならぬ場合もあるのが、現在の世相の眞状態である、人事の實現象である。
然し人間社會が

無益の衝突と争闘

とを避け無ければならぬのは、人類の本性から言つても、世界の歸趣から言つても、當に然る可きことである。たゞ及ぶ可きだけは衝突争闘は避けざる可からざること勿論であるが、扱又衝突争闘は

愚は争闘
の因

人間界の
無益の摩
擦

ど起り易いことは無いのである。これは畢竟人類の愚が之を致すのであつて、愚なれば愚なるほど争闘衝突は起り易く、愚ならざれば愚ならざるだけ、争闘衝突は起らざる譯である。精良なる機關とは摩擦の爲に其の力を消耗することが少いのを云ふので、不良なる機關とは摩擦の爲に多く其の力を消費するものを云ふのである。人間社會全體を一機關に比して見れば、人間社會の争闘と衝突とは、即ち無益の摩擦なのである。若し人類の全體の智識が進み感情が圓ならば、恰も精良なる機關が、摩擦より生ずる無益の噪音を立てざるが如くに、何等の支吾無くして諸般の事は進行されて、そして忌む可き不快の現象は那處にも生起すること無くある可き筈なのである。然し然様は行かぬのが今日の實際である。甲者の智識と乙者の智識との差が有れば、甲者は是の如くせんと欲し、乙者は是の如くせざらんと欲することが無い譯にはならぬ。たとへば甲の齒車と乙の齒車とが工合よく吻合せぬやうなものである。そこで甲の車

○自然的の組織

實際問題に於て起る原因

○修者論
は進まんとするも、乙の車は之に伴つて進まず、乙の車は運動せんとするも、甲の車は速進せんとするが如き状態を呈すると、勢そこには無益の力が費され、甚しきに至つては那方かの輪齒を缺損せずんば已まざるやうの事を生ずるのである。政治上や事業上の實際問題の争闘を傍観すると、いつも是の如き状態が見えて、其の那方が可にして那方が不可なるかは別として、甲乙の間に

識見智能の差

があつて、そして其の差が兩者を吻合せしめぬことが、雙方の不満足の原因となり、争闘や衝突の原因となつて居ることを思はしめる。それも單に乾淨な理智上の事のみならず宜いが、然様いふ事情の上、感情が附帯する日になると、然無きだに摩擦の多い機關に、塵埃や礫石が介在したやうな譯になつて、愈々不妙の状態を現出するのである。

人と人と差の種々の

智識の差のみでは無い。思想の差、感情の差、趣味の差、道徳の差、これらの差は其の甲の有するものと乙の有するものとの、那方が可いか不可かは姑らく論せずとして、

差があれば即相吻合する能はざる

ところが有り、相吻合する能はざるところが有れば即相衝突支吾して、無益の摩擦を生じ、甚しきに至つては相攻撃し、相剋損するに至るのである。例すれば孔孟やストアの思想と頽廢思想とは、相追隨し難い、禁欲を神聖なりとする思想と、享樂を極致なりとする思想とは決して吻合し難い。求心的感情と、遠心的感情とは、夥しい差があり、幽微な感情を有する人と、粗硬な感情を有する人とは、合致し難い。趣味には善悪も邪正も無い、智愚も當否も無いが、高低精雑はある。其の低趣味と高趣味とは何として一致し得よう。乙の悦ぶところは甲の擧感するところたり、甲の贊嘆するところは乙

○自然的の齟齬

彌勒出で
突らば絶え
ず人に衝

○修者論

の不可解とするところであれば、對牛彈琴、投珠按劍の喩の通りで、如何とも致しかたは無い。道德の如きに就ては、本おのづから差のあるべき理は無いのであるが、それでも其の根本に於て、擬人的最優者を認めて居るもの、即有神教を奉じてゐる者と、結果的逆推論を立てゝゐる者、即功利説を信じて居る者とは、同伴者たり難いし、又何教を奉ずると奉せぬとに關せず、其の内證に於て宇宙之仁を感知してゐる者と居無き者とは、春と秋との相會はざるが如きものがある。凡そ此等の差は、古談の所謂彌勒出世の時に至らば知らぬこと、永く此の世間に存在すべく考へらるゝのが實際の世狀である。然る以上は人間世界に衝突や争闘は絶えさうにも無く思はれるのである。

今是の如きことを言ふの意は、此等の事を當然なりとするに在るのでも無く、又此等の事を排除す可しと告ぐるにも存するのでは無い。たゞ人間幾多の衝突や争闘が、此等の差のみより生ずるならば

それは先づ是非の無い事として諦めもす可きであるが、其等の差より生ずる避け難き衝突や争闘以外に、別に人間の紛紜を生ずるものが存在して、そして意外に多く其の爲に吾人が惱まされ苦まされ、社交上にも事業上にも無益の阻礙と扞格とを受けて、一層繁く人間の不幸不利をなすことを告げ、少くとも其の無意義の禍根だけを勘破して之を除かんことを求めようとするのである。

それは何かと云ふと、

自然的の齟齬である

自然的の齟齬とは如何なることを指すかといふに、前に擧げた智識の差や、思想の差や、感情、趣味、道德それ等のもの、差より生ずること無く、即相互の分内の事より生ずる不妙の事で無く、相互の無意の間より生ずる不妙の事を指すのである。本より然るのでは無く、偶然なので、情理の必至では無く、運命の偶至である。一

○自然的の齟齬

無意より
生ずる不
妙の事

○修者論

例を擧げて説かうならば是の如きものである。
 某甲が某乙に對して多少の敬意を懐いて訪問したのである。然るに乙はたま／＼不在であつたので甲は意を失つて歸つた。他日また甲は乙を訪うたのに、また折悪く乙は不在であつた。是の如きことが繰返された結果、甲は其の事を自然の齟齬と解して意に介せねば宜しいが、然も無ければ一時の不在といふ其の事に對する不快は一轉して、終に其の人に對して不快を懐くに至るものである。是の如きことより不快は不快を生み、或は敵意を生ずるに至ることも、有るのであるが、此等の事、若くは此等に類した事情は、非常に多く實際に存在するものである。醒世恒言であつたと記憶するが、數人を訪うて遇はざるより宛を結ぶことを叙してゐる談が有る。本のづから無意にして生じたことでも、不快は不快であるから、甲者の度量が廣くて、自然の齟齬といふことを認めて、釋然として之を意に介せぬにあらざる限りは、勢として不妙の事象が起つて來るこ

とは免れ難い理である。たゞ不在で相遇はぬといふことのみでは無い。人事には是の如き偶然もしくは自然の齟齬が甚だ多いものである。人が聖人賢人ならばいざ知らず、張三李四、權兵衛八兵衛の輩、聖賢にあらざるよりは、何等かの事情に遭遇すれば、其の事情に遭遇した時の

餘氣

といふものゝ存するのを免れぬのが人の常である。喜悅のあつた後は喜氣が残つて居る。喜氣が残つて居るところへ訪問すれば、其の對談者はおのづから愉快に待遇されて、そして其の用事も順風張帆的に運ぶを得る傾が有らう。しかし忿懣恨怒の事情に遭遇した人に會つたならば、其の人に對して怒氣の餘が残つて居る以上、對談者はおのづからにして不快の地に立たねばならぬであらう。茶を盛つた碗には茶の餘氣があり、藥を盛つた蓋には藥の餘氣がある。此と

○自然的の齟齬

餘氣の爲
ひゆきちが

○修 者 論
同じく或人が或事に遭遇すれば、勢として喜怒哀樂愛惡欲等の餘氣をといめて居る。人としては勿論餘氣を留めて他人に接す可きでは無いが、扱それを常人に望んだとて、常人はなか／＼餘氣を除き去り得るものではない。そこで好い餘氣に接したものは論も無いが、悪い餘氣に接したものは不快と不利とを得させられる譯になる。これもまた自然の齟齬であつて、我に取つて不妙の餘氣に接するといふことは随分世の中に多いことである。是の如き事が雙方の間の不妙の一因となつて、そして圓滿に解決する可き事も、衝突や争闘に終るが如き結果になることも少く無いのである。又人は時として其の心を一方にのみ

傾 注

專心の爲
ひゆきちが

して居ることもあるものである。たとへば理學上の一問題に心を傾けて居て、たま／＼其の人が或ヒントを得て或假説を立てかゝつ

おのづか
ら生ずる
妙の事情

て居るとすると、そこへ美術談を持込んだものは、おのづから冷淡に待遇されるゝを免れまい。是の如きも自然の齟齬で、其の理學者に惡意冷情が存せぬにしても、自然と然様いふ不妙の事情が生ずるのである。某國の人と某國の人との間におのづから不快の感情があるとか、某氏の友と某氏の友との間におのづから打解け難き情の存するとか云ふが如きことも、之を自然の齟齬として観る可きことが甚だ多いものである。

凡そ此等の自然の齟齬は、之を自然の齟齬であるとして、

還元的に解釋

して終へば、皆除去し得る不妙の事情であるが、やゝもすれば自然の齟齬を自然の齟齬と認め無いで、造り出さずして可なる間隔や溝渠や障礙や争端を造り出す場合が決して少く無いものである。此の自然の齟齬といふことに留意して人事を解するのは、人事の紛糾

○自然的の齟齬

人間の紛
争を減
すべし

○修 者 論
を少くする上に於て、非常の利があるに疑無い。自然の齟齬を自然
の齟齬と認めて見れば、人間の紛争は其の一半を減じて、無益の摩
擦に動力を消費して終ふやうな不利の事情は、大に掃除さるゝの好
況を見るであらう。そして個人としての寛大とか洪量とか不偏倚と
かの美德が、之によつて助長さるゝことも、亦疑無きところである。

可能率の擴張

鐵 線

抵抗力

を強牽して已まざる時は、其の鐵線は堪ふる能はざるに至つて終
に中斷する。蓋し斷えんとして未だ斷ゆるに至らざる時は、即其
の鐵線の牽引に堪ふる最高頂のところ、該場合は何十貫乃至何百
貫何千貫の牽引力に堪ふるといふことを、右の鐵線の牽引に對する
抵抗力の可能率若干といふ。これは普通の事である。

當面の作
業と潜在
せる能力

五十貫目なら五十貫目のものを一鐵線が吊上げて居るとする。又
同じ五十貫目のものを他の一鐵線が吊上げて居るとする。双方共に
右鐵線が斷れぬ限は、鐵線の作業は同一である。然し兩鐵線が同大
であつても、甲のは通常鐵線で、乙のは鋼鐵線であるとすれば、差
當つての作業は同一であるに關らず、可能率は鋼鐵線の方が高いの
である。で、

○可能率の擴張

可能率の高いもの

豫備力
の方は、畢竟豫備力がそれだけ多いといふことで、實質の優秀と、作業の範囲の闊く且時間の永いといふことを意味するのであるから、すべて可能率の高いものは、高價であるにかゝらず人が之を得んとするも當然の理である。

人の能力

といふものも、また同じ鐵線の能力に種々段階の存するが如く、高低大小の種々があるものである。強ひて分つて説けば、體力と精神力との二方面に於て、人々個々に其の能力は差のあるものである。然し人の日常の執務や生活は、然のみ差のあるものでは無い。そこで同じ學校に在つて學ぶ者の學課の負擔は同じであるが如くに、同じほどの地位で同じ官廳や會社に在る者が執務する場合とか、同じ

人の能力
の差と場
合の異

やうな境遇に在つて同じやうな業務をなす場合に於ては、各人の能力が或者は高率を有し、或者は低率を有して居ても、直接日々に見はるゝところは、何等の差等が見えるものでも無い。然し其の能力が異なつてゐる時は、何等か異常の場合に際して、即ち非常の繁劇が來るとか、蹉躓が起るとか、紛擾が生ずるとかの場合等に際して、平日よりも倍加せる力を要するに當つて、甲の人と乙の人との差は、歴々分明にあらはれる。そして然様いふ場合こそ人の大切な場合であるから、人の力の可能率の高からんことは、何人も希望するところである。或人は一夜を徹すれば、身心疲倦して自ら堪ふる能はざるに至り、或人は二徹夜するも猶餘力あり、又他の人は三夜を徹するも猶事に當り務に服するに堪へる。可能率の高い人は、實に其の人自身の幸福のみならず、事業の進歩、世務の遂行に於て、他の幸福をも増進するものである。此故に人の

可能率の擴大

人の力の
可能率

は個人に取つても社會に取つても有益の一要件である。甲の國の兵士の行軍の可能率は、一日に僅に六里である時に、乙の國の兵士の行軍の可能率が一日に七里である時は、甲乙相戦ふに當つて、乙の國は何程甲の國よりも有利の地に立つか知れぬ。作戦の計畫から、兵員輜重等の操縦措置に至るまで、萬般に涉つて一里の差が非常の影響をなす譯である。兵士一人の携帶荷擔するところの物品の重量が、甲の國では七貫目を以て限度とし、乙の國では八貫目を以て限度とする時は、乙の國は甲の國に比して甚しき利益を享有する。一人に就て論ずれば、言ふに足らざる些少の事も、多人數に就て論ずる時は、實に驚く可き差異を生ずるものである。短時日に就て論ずる時は、言ふに足らざる少許の差も、長時日に於ては非常なる差を生ずる。農夫一人の完全に従事し得る土地面積が、甲の國では一反

兵士の例

農夫の例

歩で、乙の國では二反歩なる時は、其の國と國との生産力の差は、實に驚く可きである。此の道理を以て個人の可能率を高むることは、個人に取つて大切な事よりも寧ろ國家に取つては一倍大切な事である。されば政治、教育、宗教等の公事に従ひ又は關係してゐる者は、國家の利福を念とする以上は、個人の可能率を高むることを念とせねばならぬし、國家は又當然の措置として、人民の

可能率を高むることを奨励

可能率を高むるを
敢てせざる
思想

せねばならぬのである。然るに個人自身、政治家、教育家、宗教家、及び國家が、此の大切な事を忘れて、可能率を高むるの工夫を閉却したならば、其の結果は實に喜ぶ可からざることになる。けれども路には岐あり、事には議ある道理で、おのづからにして可能率を高めぬのみならず、却て之を低めるやうな傾向や方針が、道理あることとして採用さるゝことも無いとは限らぬのである。一例を設

〇可能率の擴張

人の能力の
高めんと
する立場
と然らざ
る立場

平家の公
達と木曾
の猛者

○修 會 論

けて之を説かうならば、平時の訓練に於て兵士の背囊や銃器の重量を如何様の程度に定むべきかといふ問題があると假定するに、平時の訓練は戦時の實際と大差なきを欲するといふ立場から、背囊の重量を銃の重量を定めて、此を最少量とすればそれまでの論である。但し可能率を高めやうといふ希望の立場よりは、背囊の重量を少しとし、銃の重量を少しとする方が、たしかに其の希望には協ふ道理である。身體の剛強は其の剛強を求むるによりて進み、其剛強を求めざるによりて減するものである。野蠻國半野蠻國の兵士は、其の身體の剛強に須つところが多いから、猶其の身體は剛強であるが、文明華奢の國の兵士は、器械食餌被服等の一切が精良なる結果として、其の身體の剛強に須つ所以の者が漸次に減却して、そしてやがては身體が孱弱になる。平家の公達もと初より孱弱なのでは無かつたのであるが、身貴くして意欲するところを遂ぐるを得るに至れるより、おのづからにして身體の剛強に須つものが少くなり、そ

英國兵と
ポアー

して何時となしに可能率の低減を致したのである。木曾や關東の猛者は、得意の地位に立つて居無かつたに、其の身體筋骨の剛強に須つ所以の者が存在して居た。そこで可能率は慥に平家の公達に超えて居たのである。英國兵がポアーと戦つた事實を驗するに、ただに精神力の故ばかりでは無い、實際の可能率が兩者の間に少からぬ差があつて、そして比較的不完全で少數な方が可なり長い抵抗を爲し得たと觀察して差支無い。一日の行軍力が英兵とポアーとの間には差があつたに疑無い。饑餓に堪へ、困難に堪へる可能率が、英兵よりはポアーの方が高かつたに疑無い。種々の點に於て可能率の高下の差のあつたことは、夥しく英兵をして不利の果を得せしめたに疑無い。すべて人體は鑄鐵製品の一定して復動かす可からざるが如きものでは無い。生命ある間は盛なる

應酬作用

○可能率の擴張

求めらるる者
は減らす

○修言論
が行はれるから、求むるによりて求めらるる者は生じ、求めざるによりて求められざるものは減じ行くものである。腕力を求むれば腕力は或程度まで増加し、脚力を求むれば脚力は或程度まで増加し、之に反して求められざるものは日に低減し去るのである。そこで可能率を高めんとする上から、現在の最適標準に n 又は p を加へたものを標準とする方が有利である。現在の最適標準より n 又は p を減じたものを求めて足りるといふやうにすれば、可能率は疑も無く減じ行くのである。ところが現在の我國の状態を考察するに、教育でも政治でも實業でも何でも

現在の最適標準

現在に
本標準
と希望
本標準
と希望
本標準

を標準としてゐるが如く思はるゝ。此には議論もあることである。又實際無暗に過重要求をするのは宜しくも無い。然し可能率の高まらんことを欲する上からは、もと／＼現在に満足するのでは無いか

安樂を悦
ばんとす
る傾向

ら、現在を根基とした標準に徇ふことは寧ろ避けたいのである。教育、政治等の上を考ふると、現在の最適標準を標準とする結果、民の可能率は漸次低減する、傾が有りはせぬかと杞憂される。又世上的の状態を考へると、一代の風氣は、漸くにして現在の最適標準を好標準として取り、若くは現在の最適標準より n 若くは p を減じたものを好標準として迎へて、其の安樂逸豫を悦ばんとする傾向が有るやうに考へられる。胃を勞せずして食物を消化し、そして胃の能力を日に日に減じ、手脚を勞せずして勞作を爲し、そして手脚の能力を日に日に減じ、速成易行を尙んで、そして精神の能力を日に日に減じて行くのが、世上の通態ではあるまいか。身心の上に於て、人の可能率は漸次に低減されんとする傾向が有りはせぬか。若し然らずとすれば喜ぶべしであるが、不幸にして然りとすれば甚だ悦ぶべからざることである。徴兵に應ずる壯丁は筋骨薄弱の者が漸次に増し、學生に精神衰弱の者が漸次に増して來るのは、可能率の高ま

○可能率の擴張

○修養論

三

らんことを欲する思想が漸次に少くなつた結果では有るまいか。吾人は飽までも人の可能率の高まらんことを祈らざるを得ぬ。そして可能率を高むるの道を講ずるを以て至當にして且つ至要の事と考へる。明治、大正、進歩は爲たであらうが、今の人々が平家の公達になるのには猶少し早過ぎると考へる。

自ら教ふるの努力

近來修養といふ語を耳目にすることが多い。

修養

修養の字

といふのは、保養だの、樂養だの、補養だの、煉養だのといふ字面と近い、養生といふことのやうに思へる語である。修養を事とするなど、云へば、餘り慾をも張らず、志を勵さず、無理な事もせぬ代りに、立派な事を爲ようと勉めせず、たゞ身體を大切に、静座法だの、賣藥いちりだの、湯治場めぐりだのを爲て居る若隱居然たる人の所行のやうにも思へる。修養といふ語は、實際然様いふ場合のところへ適當する意味で用ゐられた例も有つたやうに記憶する。然し今日の所謂修養といふのは、修行とか修煉とか智徳の鍛錬とか心性の涵養とかいふやうなことで、養生の事では無いのである。

○自ら教ふるの努力

三七

勿論修養の一語は今日の多くの人が用ゐて居る意味にも用ゐられ得るし、また用ゐられた例も有るに疑無いから、今更其の語意の詮議立を爲しようとは少しも思はぬのである。

但し今の所謂修養々々といふ事に就ては、聊か疑はしいと思はる節が多い。修養といふ事は實に善美なことには相違有るまい。けれども修養の方途が既に一條の道のみで無くて、種々様々あるとすれば、其の中の孰かは妙で、孰かは不妙で、孰かは正しくして、孰かは正しく無くて、孰かは功多く弊少なくて、孰かは功少く弊多きも有る道理で有らう。して見れば、たゞ一口に修養々々と云うても、其の所謂修養の語の善美なるに蔽はれて、

修養の方途の如何

を考へ無くてはならぬ譯で有るではないか。修養の一語に眼晴を瞎却されてはならぬ譯である。修養の一語を萬能丸の如く尊信して、

修養に就ての疑

兵家と儒家の修養の差

それで果して宜からうか否耶、思慮あるものは安りに矮人觀場の陋を學んではならぬのである。

同じ修養と云うても、兵家者流の修養と、儒家者流の修養とは違ふで有らう。孫子は智仁嚴勇信の五を標的にして居る。成程嚴の一徳も兵家者流には必要條件で有らう。しかし儒家者流では嚴の一徳を然のみは擧げぬ。孟軻子以後儒家の標的は仁義禮智信と掲げ示されて居る。嚴の一字は、小人と遇するに當つて、悪くせずして嚴にす、と易に掲げられて有ることは有るが、智や仁と並べ擧げるほど大切なことゝもなつて居らぬやうである。儒家者流の中でもまた、孟子系統は性善説を執つて居るから、其の修養は人の性の自然に率つて、其の自然の美を戕殘し無ければ宜いとするのであるが、荀卿系統では必らずしも人の性善とは觀て居らぬから、禮樂刑政の設備を十二分にして、外よりして内に及ぼさうとするのである。即ち一は開發誘導を是とし、一は範鑄規矩を是として居る。一は内を全う

孟子系統と荀子系統の差

〇自ら教ふるの努力

修養の方途の種々

○修養論
して而して外に至るを修養の本路とし、一は外を善くして内に至るを修養の本路として居る。根柢の解釋が違つて居るから、従つて修養の道の違ふのも、當然であるが、同じ儒家者流の中でさへ是の如きの差がある。まして老莊派や、刑名派の家々の修養、墨子派や、管晏功利派の家々の修養、又一層離れて厭離穢土欣求淨土の思想を眞なりとする佛徒、慈観および悲観を當に然るべしとする佛徒、不煩悩即證菩提を妙なりとする佛徒、奴婢道德を捨て、超越凡庸を可とする近時の人々の修養、古い基督教、新しい基督教の人々の修養、此等は皆家々の風、宗々の義によつて、甲乙丙丁戊己庚辛壬癸それぞれ差があるは勿論である。然すれば漠然として修養と云へば、非難す可きものは一も無いけれども、詳しく立入つて論じ考ふれば、或は是とすべく、或は非とすべく、或は半是非、或は是非非で、一々それ／＼に異つた評價と判釋とを受くべきものが有つて存するであらう。で有れば修養の一語の標榜に眩惑されて、直に之を善と

今の修養に本重するに

し之を可とし、之を尊み之を信せんとするのは、早計である。今日修養を説く人は甚だ多い。然し其の修養の教が、幸にして佛教とか、基督教とか、儒教とか、道家とか、乃至は或學派に根ざして居るとか若くは依據して居るとかならば、明白に其の教の性質を知り、随つて其の功過をも知ることが出来るで有らうが、若し其の教にして駁難不純で有る時は、甚だ解釋し判定するに困らねばならぬし、随つて其功過如何をも豫想し難いのである。否、今日の修養の談の多くは、寧ろ或學派或學系に依つては居らないで、其實は卑淺な

功利を中心とした思想

に彩色されたものが多いやうに感じられるのを遺憾とする。功利を中心とする思想は高深遠大な思想ではない。併し決して悪い思想でも無く、又強ち排斥す可き思想でも無いには定まつて居るが、功

○自ら教ふるの努力

利中心の修養といふことになる、それが果して有力で有り得るか如何か、といふ事には疑を挿むの餘地が有りはしまいかと思はざるを得ぬ。

功利中心の修養も亦宜しいとして、一步も二歩も假したとするにしても、其の修養の方途が形式的格套的になるに至つては、愈其の効力をも意義を疑はざるを得ぬのである。是の如くすべし、是の如くすべからず、是の如く是の如くすれば、富致すべし福招くべし、是の如く是の如くすれば、功成す可し、業旺なるべしなど、云ふ其の教條が、愈實際の事に近く、愈格套的なるに至つては、之を信奉する者に在つては、其の教が與ふる利益を受くることは勿論で有らうけれども、然も一人の自己の風丰精神を桎梏され鎔鑄されて、活潑潑地、石火迸裂といふやうな、自己と外境との接觸によつて煥發閃出する靈機妙用をも何をも失ふに至るの弊を受くることは少く無からう。功利中心も宜いけれども、功利中心の修養論の、ケチな實

功利中心の教、實に切なれ、實に人愈眞を失ふ

古句に所謂蓋を度々あけ、下手な奴

功利中心にあらざる修養

他人の成に功談し近し

實際的な教は、徒らに人の英氣を挫き、霸氣を折き、勇氣を損傷し、人をして鍋蓋を數々開けて見る拙劣なる料理人の如き忌む可き心理を有する人たらしむるに過ぎぬの弊が有りはすまいか。

霸氣

は其の弊の多いものである。併し霸氣無き商人は終に其の大を成さぬ。英氣は事をあやまることも多い。併し英氣無き士人は終に凡鳥たるを免れぬ。勇氣は大失敗を招き致すことも多い。併し勇氣無くして人終に何を傲し得んやである。修養を念とするならば、よしや其の人の本心が功利を思ふにあるにしても、功利中心で無い修養の方途を擇んだ方が眞の利益が有らうと思はれる。功利中心で、しかも小さな経験などから來つた實際的教訓などは、これを信奉するものをして、たゞに其の氣宇を小さくし、局促たる感情の習慣のみを得せしむるに止まるのであらう。弱き魚は他の魚の後にのみ従ふ

〇自ら教ふるの努力

他の後に
從ふ者は
是

○修省論
ものである。爲す有らんとするものは、他人の足跡にのみ隨ふ要は
無いのである。

努力

である。備の努力である。備をして備の歩む可き眞の道を見出さ
しむるものは、備の努力である。

人を信ずるの苦行

苦行

類
苦行の種

にも種々ある。生死を出離し、菩提を成就せんが爲にする苦行も
ある。名を揚げ威を振ひ、古今の一人として、天下に横行潤歩せん
が爲にする苦行もある。國家の爲、人民の爲、若くは世界の爲にす
る苦行もある。一家の爲、一個の爲、若くは小慾の爲にする苦行も
ある。志すところが是の如くに種々あると同時に、其の爲すところ
も亦種々である。跋迦林外道や、西教舊派の行者の如く、形式に身
を殉へて、奇怪なる苦行をするものもあれば、蘇秦が股に錐したり
甘細が射を學んだりするやうに、専心を主とする苦行をするものも
あり、良將たらんが爲に、士卒の難を吮つたり、傷を裹んだりする
ものもあり、又一言の誓を立てんが爲に、母病めども郷に還らざる
やうな人情の忍ぶ能はざるを忍ぶものもあり、妻子は飢寒に泣叫べ

○人を信ずるの苦行

○修者論
ども、國の爲に之を顧みざるものもあり、刀杖瓦礫の責め苦を甘んじて、遠流貶謫を意とせざるものもあり、苦中の苦を喫して後に磔殺せられ刑戮せられて、しかも悔いざるものもあり、或は食はんと欲するものをも食はず、衣んと欲するものをも衣せず、爪に火を點するが如くにして日を送る者もあり、苦は同じく是苦であるが、志すところの異なるに随つて、種々の状態をあらはす。苦行の因、苦行の相、高下大小があり、深淺厚薄があるが、要するに願求するところがあれば、必ず其處に苦行が伴ふのは、人の世といふものが、元來或一人の爲に出來てゐるのでは無いから、或路を通過して或點に到達しようとする以上は、勢として其處に扞格するものもあり、障礙するものもある譯で、そして不斷の執着を有する願求者に取つては、それ等の扞格や障礙が、おのづからにして苦行を敢てせしめずんば已まぬからなのである。苦行は誰も好んで之を爲すのでは無い。一本足で長い間立つて居たり、全身に灰を塗つて怪物の如くに

なつたりするが如き馬鹿氣た苦行でも、其の苦行の結果として光り輝いたものを得ることが出來ると思へばこそ敢てするのである。苦行より樂行が爲したいのは、萬人の通情である。そこで、

易行安樂行

を標榜するものが生じて、難行苦行をせずとも濟むことを教へる者があれば、人は皆喜んで其の旗下に聚まる。然し易行もまた易行では終らぬ。一たび彌陀の名號を唱ふれば、即時に無量の罪を滅すと聞けば、まことに易行である。しかも稱名の出來無い者が世に澤山ある。其の稱名の出來ない者の上に就て察すれば、稱名も實に易行のみでは無い。彌陀宗の者には稱名は實に易行であるが、未だ彌陀宗に歸せざる者には一稱名も決して易行では無い。法華の安樂行品は實に坦々として砥の如き道を示してゐる。法華の行者が之に従つて身を持し世に處するのは決して苦行では無くて、しかも亦

○人を信ずるの苦行

儒教の平易の教

人事皆做すし易から

○修者論
自身を安樂に保つて行く道であるに疑無い。けれども安樂行品を心得て現し得たと考へらるゝ人は甚だ少いところを見ると、これもまた中々の苦行である。儒教は平易明白な教で、人の性に率ふを道としてゐるのだから、本來は峻峻難到の教では無い筈である。けれども此も易行とのみは云へぬ。顔子の賢を以てしても始終一貫は難いことで、孔子の聖を以てしても心の欲するところ短を踰えざるに至つたのは晩年の事であつた。それ等に照して見ても、教旨に随つて過無きを得るのは、中々難行であるに疑無いのである。此故に易行も難行であり、安樂平正の行もまた苦行である。一切の事はすべて生易しいものではない。紙の上に直線一條を畫くのでさへ、中々笑顔では出来ぬのが凡人の境界である。どうして接物處事の一々を、笑顔なんぞで工合好く凡人に行つてゆかれう。猫の鼠を獲るが如く、鶏の卵を抱くが如く、随分油斷無く工夫して、そして辛うじて事物は扱ひ得るのである。平凡の者に取つては、何も彼も

難行苦行

生活も難苦なり

生活の難苦愈々

である。生活して行くといふことは、肩あれば衣ざる無く、口あれば食はざる無しであるから、さして難苦の事では無い筈であるが、それですら中々容易では無い。肩あれども被兼ね、口あれども食ひかねて、鐵道往生や、木の枝、水の底に、難苦に堪へかねた身體を埒明くるものも有る世の中である。生活さへ難苦である。まして生活の發展させて行かうといふのや、業務を成立たせて行かうといふのや、社會上の地位を得て行かうといふのや、際限の無い慾の山を、短い弱い脚で上り上つて行かうといふのや、大なり小なり吾が理想を現して行かうといふのは、眞に容易の事では無いのであるが、さて難行だから中途で止めよう、苦行だから思ひ斷たうといふことも出来ぬのが、人の世の態である。就中吾人が世に立つて行くには、親切も深くなければならぬ、義理も堅く無ければならぬ、學藝も修

○人を信するの苦行

一切苦行

め無ければならぬ、社交も勉め無ければならぬ、愛敬も好く無ければならぬ、算計もたしかで無ければならぬ、智慮も逞しく無ければならぬ、何ちや彼ちやとて、何も彼も容易には出来ぬ。それらを善くせうといふのは、皆難行であり苦行であるが、有るが中にも取分け

人を信ずるは大切

なことである。人を信ずるといふ事が無ければ、自己が親しく擧手投足することのほかに、一指も染め難く、一步も踏出し難くなるのである。人を信じ無ければ人は使へぬ、人を使はねば仕事は擴張し得ぬ。槍使棒使で一生を終るには、自分が上手に槍を使ひ棒を使へば、それで吾が事終るのであるが、扱さゝやかな一商店を経営するにも、言ふに足らざる一事業を仕遂げむとするにも、人を信ずることの必要は必ず伴ふものである。既に人を信ずる以上は、

人を信ずる必要

信じて使はねばならぬ

疑つて人を使ふのは、人をして才を伸べ力を致さしむる所以の道では無い。之を愛し、之を信じ、之を尊んで使はねば、妻の親、婢の卑ですら、彼もまた疑つて念を二にして事へるであらうから、何様して之をして十二分に其の力を出し才を働かせ得よう。獵犬ですら信せずして用ゐる時は、其の功が鈍るといふことである。まして親族でも何でも無い他人を、乾燥した報酬問題から生じた關係を基礎にして使ふのに、信せずして使ふやうでは、何として効果が擧がらう。此の人必ず此の事を能せんと信じて、そして一毫の疑も無く打任せると云つたのは大古の事で、今日では人は己を知る者の爲に死しすまいが、然し己を知る者を悦ぶか、己を知らざる者を悦ぶかと云へば、誰だつて己を知る者を悦ぶには疑無い。人をして知己

知己の感

○人を信ずるの苦行

の感を抱かしむるのには、其の人の心機の運用を流滑自在ならしめて、
 そして其の人の力の能くす可き範圍内に其の人の至極の精神の活動
 を自在ならしむる所以である。之に反して疑つて之を使へば、使
 はるゝ者も亦其の疑はれつゝあるを感知するが故に、精神は萎縮し、
 事に當つては疑懼の念に驅られ、其の才智も能力も十二分には發揮
 されずに終る可きである。此の道理と情勢とは、苟も常識ある者の
 心眼には、自然と映じ來りて解得さるゝが故に、人を使ふほどの者
 は皆人を信じて使ふべき者であることは、百も台點二百も承知して
 居るのである。又自己の使はぬ人、即對等交際の人に向つては、

信じて交はらねばならぬ

ことも明白の理である。すべて他人に對して其の人の信す可から
 ざる人なるを思ふといふことは、其の人に對しては甚しき無禮であ
 り、又不道理千萬な誣妄的豫想である。我が人に信せられぬ時の如

何を考へて、人の我に信せられぬ時の如何を知る可く、人と人と相
 信せぬ光景の陰暗荒涼たる光景を觀じて、人と人との相信せざる可
 からざる所以をも知る可きである。また他の一面より論ずれば、人
 を信せぬといふことは、信せられぬ其の人よりは、信せぬ其の人の
 心の中が險惡狹隘で、且又荆棘毒草が満面であることを語つて居る
 ものであり、同時に其の人が他人に信せらるべきにあらざる實質を
 自己の中に有して居ればこそ、他人を信せぬのであらうと推測さる
 べきものである。智多き人は他人の無意偶然の行動をも、何等かの
 智慮より出でたるものと猜し、智少き人は他人の智計より出でたる
 行動をも、何等の意味無き事として接するのが常である。すべて人
 が

他人を觀察し批評

するのは、一には自己の正反對の者とし、他の一には自己の如き

者として観察し批評する。小心の人がさまで放縱にもあらざる他人を觀察して、彼の人は甚しき放縱の人なりとするが如きは、自己の正反對の者として他人を觀察するので、悪人が他人をも悪人ならんと猜するが如きは、自己の如き者として觀察するのである。心の破れ盡したる兇惡の徒の如きは、大抵世間に善人の存するを信せずして、世間たゞ偽善者あるのみとするのが常である。之に反して善良の好人物は、世間に猫被りと云はるゝ人物の存するに心づかずして、如何はしき人物をも善良の人物として遇して、其の謀り陥るゝところとなるが如き例も多くある。此の意味に於て、人を信せず、若くは人を信じ得ぬ人の一半は、自分が人に信せらるべきやうの人物で無い人であり、他の一半は、自己は人に信せらるべき誠實の人物であるけれども、或場合に懲りて、そして美に懲りて膾を吹く人となつて居る人である。心の破れ盡して居る人の如きは姑く措いて論せぬで宜いが、先づ普通の人は

或時は人を信じ或時は人を信ぜぬ

といふのが通常である。此等普通の人は人を信する事に就て、是非の考を爲るも爲ぬも無く、たゞ漫然と信じたり信じ無かつたりするのであるが、世間の實際は是の如くであるにせよ、此等の人も先聖前賢の教を聴いたり味はつたり、又は深く人の世の實相を考へたりする時は、人といふものは人を信せねばならぬ、妄りに人を疑ふといふことは善惡から云つても宜しく無く、利害から云つても妙で無いことであるといふことに到着するのである。

そこで善良な聰明の多くの人は、自己の使用する人に對してのみで無く、對等の人に對しても、すなはち一切の人に對して、疑ふよりは信するが宜いといふ經驗や直覺や判断を得て、之を是認して居る。此の事實は、やゝ高尚なる人格を有する人々に就て、人を信す可きであるか人を疑ふべきであるかといふ問題を提出して見れば直

世人を信ずる人は少く
人々を疑ふ人は多し

○修者論
に明白にすることを得るのである。下劣な、利己心のみの強い、刻薄な人間はいさ知らず、向上心ある者は、人を信じ得ざるまでも、人を信ずるは人の當に抱くべき考だとは思つてゐるのである。然しそれならば世人の多くが人を信ずるかといふと、比較すれば

人を信ぜぬ人は多く

人を信ずる人は少いのが實際である。古歌にある通り、悪しきとも善きとも如何に言ひ果てん折々變る人の心を、であつて、人といふものは、善き人も時に悪き事を爲し、悪き事を爲せる人でもまた善き事を爲すものであつて、徹頭徹尾悪である人も少いやうに、徹頭徹尾善である人もまた少い。そこで信ずるに足る人は世に少いに相違ないから、畢竟信せらるゝ人が少い結果、人を信ずる人も少くなる數理ではある。けれども人を見て盜賊と思ふが如くにするのは、不徳である。たとひ宜しからぬ人に對しても之を遇す

人を新にして自ら棄つてとせしむる

ること猶宜しき人を遇するが如くにすれば、其の人も感孚して宜しき行爲をするものである。又少々良き人でも、之を遇すること悪人を遇するが如くにすれば、終に自己を虐遇酷遇冷遇する人に對しては宜しからぬ行爲をも敢てするに至るものである。是の如きは利害の上の事であるが、人を信せずして之に防備し、ひそかに城府を設け戒心するといふことは、人情の美しみの缺けて、智慮の刃のみが磨がれた厭はしい光景で、其の春雨春風の溫和が無く、寒風寒雨の淋しさのみの存する有様は、他人に及ぼす影響の如何は措きて、其の人自身の心術を損じ、徳の一面たる

平和暢快の趣を失

はせるだけでも、決して少い損失では無い。古の人は閑思雜慮をさへ人の心術を壊るものとして之を惡み嫌つて居るのである。まして人を信せぬといふことは、心の徳であり愛の理であるところの仁

人を信ぜざるは心術を損す

○人を信ずるの苦行

百惡は疑
より住す

○修者論
を破壊するに當つてゐるのである。仁やうやく失はるれば、巧偽おのづから生ぜずには居ない。蓋し百惡こゝより生ずと云つても宜いのである。世上多少の善良の人が、世路を經來つて心漸く動むのも、初は人を信じて數々人の爲に欺かれ、終に人を信せざるに至つて吾が心術を壞り、それより漸くにして美はしく無い人になるのである。

人を見たら盜賊と思へ

人を疑へ
ば富を得
て仁を失

といふ俚諺が、如何に賢くて、そして如何に情無い訓を垂れて居ることであらうか。これこそ随分人の世の眞を穿つてゐる諺であつて、此の諺に従つて身を保ち世に處した方が過失は無いかも知らぬが、此の諺を信奉した日には、富者にはなれるとも、不仁になるには疑無い。もつとも爲富不仁の語さへあるから、それも致方は無いか知らぬけれど、人をさへ見れば肚の中で密に番犬を吠えさせたり

繩を絢つたりして居る人の、樂屋の騒も憫む可きものである。たゞし是の如くに人を信せぬことの非なることを知つても、世路を經來つた者が、自己の不廉なる代料を拂つて、そして買ひ得たる經驗が與へる注意や忠告の聲を耳にしなから、猶且人を信せんとする時は、

一種の苦行を

敢てするやうな状態になる。

智と情と
の齟齬

人は信じ難い、然し人を信じたいといふことは、明らかに智と情との齟齬、若くは批判と希望との不一致である。人の信じ難いものであるといふことは、社會の實際が教へることであり、冷淡なる吾が智識が示すことであり、吾が智識を以て社會に臨めば、然様いふ判断はおのづからにして出て來るのである。然も人を信せぬやうにありたく無い、人を信じたい、といふことは、吾が心裡の實際の狀態であり、又社會の實際が然様せよ然様せよと教へることであり、

○人を信するの苦行

○修 省 論
温き吾が情を以て社會に臨めば、然様せねば社會も良くならぬ、然様するのが社會に對して取る可き道である。然様したいものであるといふ希望が、おのづからにして出て來るのである。すなはち明らかに一大矛盾がこゝに存在するのである。此の矛盾に於ける解決は目前の利害に重を置けば、人の信じ難いといふ方に立つて人を信せばやうにするのであるし、徹底した眞實に重を置けば、人を信せねばならぬといふ方に立つて人を信するやうにするのである。

人を信ぜぬのは容易である

智識がこれに左袒し、自利の念が之に助力し、經驗が之を支持するから、人を信せぬ方には自然にして傾き易い。

人を信するのは難苦である

人を信せんとすれば、智識が之を裏切する、自利の念が裏切する、

經驗が裏切する。たゞ希望の光が弱く輝いて我を導いて居るのみであり、情の火が僅少の温を以て我を温めて居るのみであり、徳を尊むの念が微なる香氣を以て我を薰じて居るのみであつて、此等の作用は、大人哲人に在つてはいさ知らず、凡夫に在つては實に弱いものであつて、却々裏切をする猛將達の優勢なるには及ぶ可くも無い。そこで人を信じたいとは思ひながらも、どうも人を信じかぬるやうになる。神が命令して、人を信せよ、人を疑ふな、といふのであつて、そして自分が神を信じて居るのであれば、或は神の加護力や愛感力に依り縋つて、そして辛うじて人を信じ得るかも知れぬが、神をも佛をも肯はぬ者の、一身微弱にして五月の苗の如く、片念定まり無くして春天の雲の如き境界に在る分際では、却々以て人を信することとは出来ぬものである。それでも猶押切つて裏切勢に負かされずに、全身の傷痕を物の數ともせず、敢然として人を信すると、災禍は或は至るものであつて、功德は却つて現はれぬものである。

○人を信するの苦行

人を信ずるより生ずる危険

○修 省 論
或は人に謀り陥れられ、或は人に罵り嘲けられ、或は財を失ひ、名を失ひ、或は地位を失ひ、職を失ひ、甚しきに至つては自己を併せて世に信せられぬやうになるものであり、猶甚しきに至つては、危害も身に及び、打擲も頭に加へらるゝに至るものである。古い人が人を待つに小人を以てすれば失少く、人を待つに君子を以てすれば過多しと教へて居るのは、すなはち人を見たら盗賊と思へといふ意に近いが、人を信ずると随分恐ろしい事にも逢ふものである。商業者の大失敗大破綻は多くは過つて人を信ずるより出で来る。戦争の大敗も多くは人を信ずるに過ぐるところより来る。人の世の災害の多分は實に人を信せざるより生ずるのも多いが、人を信せざるより生ずる災害は、微細にして陰に潜み、人を信ずるより生ずる災害は著明にして陽に發する。しかし其の陰に潜める災害が實は微細でも無く、陽に發する災害が必らずしも巨大なもので無いが、とにかくに表面に見ゆるだけでは、人を信ずるより生ずる災害は比較的

人を信ずるの二重の苦行

い。そして其等の災害は之を隠忍黙受するよりほかは無い。こゝに至つて最初に人を信ずるのが既に一大苦行であるのに、後に至つて復これより生じた或結果を引受けねばならぬといふ一大苦行に堪へねばならぬのである。然し其の時に至つて始めて其の人の眞骨頭があらはれて、

眞英雄眞君子

か、僞英雄僞君子か、分明になるのであり、又眞に英雄たらんと希ひ、君子たらんと願ふのである人か否か、分明になるのである。英雄でも君子でもない自分が凡人小人を信すれば、災禍に遭ふには定まつて居るが、始めに敢て凡人小人を信ずるのは、其の凡人小人を化して、善人大人となす所以であると同時に、自己が直下に凡人小人の分際を超越する所以である。又終に敢て其の災禍に甘んじて堪へるのは、其の凡人小人を化して善人大人となす所以であると同時に

凡人を信ずるより生ずる危険

○人を信ずるの苦行

凡人を倍
に悔い
て人はい
がさるる
が凡そ
以て人
所過す
を

○修 省 論
に、自己がいよ／＼凡人小人の分際を透過して終ふ所以である。眼
を擧げて世を観るに、實業界でも他の界でも、敢て此の苦行を爲し
て居る人も絶無では無くて、そして其等の人々が結局は其の大を成
してゐるのである。大奈翁が泥土より良將軍を得たりといふは一と
通の事では出来ぬのである。此の苦行の一關を透過し得て後に始め
て泥土より良將軍を得るのである。不輕菩薩の得度の古談、談豈容
易ならんやと云ひたい。

一様の資格の階級 實業家

といへど、生産に關聯して務を執り身を委ねて居るものは皆實業
家である。或は大であり、或は小であり、或は専門的であり、或は
兼攝的であり、又或は商、或は工、或は農、或は漁であれ、其他何
であれ彼であれ、生産に緊密に關聯せぬ業務を取つて居るもので無
い以上は、皆均しく實業家であつて、其の間に甲乙は無い。小賣商
人も實業家なれば、大資本家たる工場主も亦實業家である。大資本
家はもとより堂々たるものであるが、小賣商人もまた不正商業者で
さへ無ければ、勿論其の實業者たるに於て堂々たるものである。異
なるところはたゞ其の交渉圏勢力圏の大小のみなのである。此の故
に實業家に階級などの存す可き筈は無い。しかし萬物おのづからに
して高下あり、優劣あり、美醜ある理である。一列に實業家とは言

實業家に
甲乙無し

○一様の資格の階級

上下の階級に在らず

○修 查 論
つても、其の中おのづからにして階級ありて、其の欣尚し尊敬すべきと、然らざるとが無き能はざるも、普通の理が然らしむるのである。然りと雖業務の種類によつて、銀行業、輸出入業者は上級實業者で、肥料商、襦袢商は下級實業者であるといふが如きことは、存すべき理で無い。如何なる業務でも、不正で無い業務は皆

同一資格

である。要するに上下は人に在つて業にはあらぬのである。然らば實業家の上下高低の階級は、如何にして定まり、如何にして存するかといふに、畢竟それは人格の反映であるからして、一列に概説することは甚だ困難である。が、若し強ひて言へば、一は利に約して其の階級を判し、一は時に約して其の階級を判することが出来る。是の如き階級の判を下したところで何の益をなさぬが、其の意は上下高低を標して、成る可く其の上なるもの、高きものに就き、下な

時に約するの判

るもの、低きものに甘んぜざらんことを望むよりの事である。時に約して實業家を判すれば、先づ

一時的に功を得んとする

者は下級實業者

であるといふを憚らぬ。たゞ眼前のみ考へて、そして功を得んとしたならば、随分功を得ることも有らう。然し一時的に功を得んとするときは、勢として後は野となれ山となれ主義に陥るし、また實際に於て恆常永久を思はぬといふことは、實業の本旨に負いて居ることであつて、畢竟一場の僥倖を希圖して居るやうなものである。十圓の物を十一圓十二圓に賣るのなら商業の習であるが、顧客の無智無識なるを利用して、十圓の物を百圓にも千圓にも賣つたならば、それは明らかに一時的には功を得たのであるが、然し畢竟は顧客に損亡を與へて自己が利得をなしたといふに過ぎぬのである。世

他を損す
す自を益

○一様の資格の階級

の所謂暖簾師なるものは、専門に一時的に功を得ることを圖つて居るものである。彼等も買買を爲すに、強迫を用ゐるでも無く、全く合意の上で、買はんと欲する者に對して賣らんとするのであるから、別に咎むべきことは無いやうなものである。然し買つた人は後に至つて其の爲に幾千の損亡を蒙つたことを覺る。また彼の暴利屋なるものも、烈しく一時的に功を得んとする者であつて、これも亦對者に損亡を與へて自己を利するのみである。凡そ此等の輩の卑むべく厭ふべきは明白の事であるが、農業工業の上にもまた、これに類した事はある。開墾を名として山林を拂下げ、林木を伐採して之を賣拂ふのみで、其の後は野となれ山となれとすれば、それも一時的には利を得るであらう。然し其の爲に其の土地は放棄されて、國富はいたづらに長く草萊に委ねられるであらう。背板や白板を用ゐて表面のみを美にしたり、塗抹によつて外觀を裝うたりして、家屋船舶を造れば、それは利を圖るに於て一時的には功を得るだらう。然し

功一時的成

信用無き
全體の自
滅

其の爲に不利益を依頼者は得るに疑無い。特に標本と異なつたものを賣り込んで、取引者に熱湯を吞ませたりなんぞするは、輸出商に於て數々聞くとところであるが、それも一時的には功を得るに疑無い。凡そ是の如きことを敢てする者の本據となつて居るところの思想は、短時間に於て巨利を博せんとするにあるので、そして一時的に功を得んとするのは、實業者として最低級最下級の資格であるといふことを自ら認めぬ結果である。實業は詩歌の如く一個的、突發的のものでは無い。昨より今、今より明に及びて、連環の絶えざるが如くに過去現在將來に互るものである。朝菌夕露の如く忽生忽滅するものは、商業工業農業の何に屬するを問はず、國家民人に取つて、不經濟不安定の甚しきものである。信用といふ空氣の存在せぬ實業界は、實業界全體の自滅である。信用といふ空氣の稀薄な實業界は、其の界の生物の繁茂し蕃息するに不利な状態である。然るに一時的に功を得るには、恆常永久に功を得んとするに比して、さまで多く

○一様の資格の階級

業務繼續
の思想と
信用重視
の思想と

○修 會 論
信用を要せぬ。否、むしろ信用を積むを要せずして功を得んとする
のが、一時的實業者の望であると云つて可い。そこで一時的に功を
得んことを希ふ者は、繼續といふことの思想に乏しく、また信用と
いふことの重要なるを感ずること少く、其の結果は不良、若くは不
正に陥り易い。一時的に功を得んとする者皆悉く不良若くは不正で
あるといふのでは無いが、少くとも業務繼續の思想や、信用重視の
思想には乏しいと云へる。是の如き緊要なる思想に乏しき實業家は、
國家民人に福利を饒るには至らない。實業家中の最下級最低級に屬
する所以であると同時に、此の種の思想を懐ける實業者に對しては
警戒し疎隔することを怠つてはならぬのである。然るに舉世滔滔々、
此の種の思想を有するが故に、未だ之を斥け之を疎んずるに至らぬ
のは、我が實業界の幼稚なる所以である。
一攫萬金を旨とする投機者流の如きは、此も亦經濟界の一機關師
として認む可く、古道學先生の如くに之を非とすべくも無いが、此

普通
の實
業家

の如き人々に在つても其の優秀なるものは、事務繼續の思想や、信
用重視の思想に缺けて居らぬなるべきは明白の事である。

恒常的に功を得んとするは中級實業家

である。即ち世間普通の最多数の實業家はこの階級に屬する。所
謂「堅い」實業家と云はるゝものは皆此の階級の者である。此等は
賭博的氣分少く、僥倖的機心少く、堅實に日月を送りて、事業と終
始せんとするといふほどの大勇猛心は無くとも、少くも事を執り務
に當つて居る間には、浮心無く、散亂心無く、たゞ其の關係せる事
業によりて、利を征し功を得んとするのほかに無いので、此等の
人の所爲が直に一世一國に對して利益を饒るといふことは無いが、
此等實著なる人々は、自己意識せずして、世の用をなし、民の福と
なつて居り、相互的交錯的の社會の一分子として、自己も社會より
利を得る代りに社會をも利して、立派なる生存をなして居るのであ
る。

○一様の資格の階級

○修 省 論
る。そして此等の人々の社會に充實することは、社會の安定性を増し、社會組織を経済的ならしむる點に於ても欣向すべきことである。たゞ此等の人は、

永遠廣大に功を得んとする上級實業家

には及ばぬ。永遠廣大に功を得んとする實業家は、中級實業家に比して多く異なるところを見ぬやうであるが、しかも其の遠大なる規模の最要點として、常に改良補正の工夫を怠らぬといふこと、及び時世の須要に應じて、舊弊を去り、新意を出し、制度と施設との簡擇に注意すること深きといふことより、不知不識社會に寄與貢獻するところあるものである。是の如き人々によりて商業工業農業は發達進歩せしめられ、弊は漸くにして除かれ、利は漸くにして興さるゝのである。時に約して論ずれば、以上の三點に照らして實業家を觀察する時は、おのづからにして如何なる階級に屬する實業家な

改良補正の工夫を
實業家の注意

利に約して
説く場合

るかを知らぬに難く無い。そして其の上級者に尊敬を拂つて誤は無いのである。利に約して説けば

一個の利を圖る者は最低級

實業家である。勿論如何なる實業家も、特異の人にあらざるよりは、自個の利を圖ることを忘れば爲まいが、たゞ自己一個の利のみを圖るものは、金錢崇拜といふ一種の拜物教を奉ずる者の如く、鄙吝慳貪、唾棄すべき状態を現はす。然し一個の利をのみ圖つても、社會の利と衝突背反せずして、平行順應する範圍に於て利を圖る以上は、それは決して咎むべくは無い。たゞ併しそれは高級の實業家とは云ひ難いのを憾とする。一個の利を圖ることゝ一致させて、

最低級買
業家

一團體の利を圖る者はやゝ上級

のもので、

○一機の資格の階級

一國の利を圖る者は愈々上級

上級實業家

のものである。名を一團體一國の利を圖るに藉りて、實は一個の私を圖るのは、最も憎むべく厭ふべきであるが、然る僞善的で無く、一團體の利を圖り、一國の利を圖ること、我が一個の利を圖ること、一致する道程を取りて、事に當り務を執るものは、實に尊敬欣向すべき實業家である。義士高士が一個の利を忘れて之を顧みず、直に一團體一國等の爲に盡心竭力するのは、もとより尊敬すべきであるが、それよりは、一團體一國の利を圖ると一個の利を圖るとが一致した道程に於て、眞の尊敬すべき實業家が盡心竭力した方が、表裏一枚、内外一徹といふ境界の妙作用を現じて、其の成敗より論すれば、むしろ敗少く成多く、一團體一國に取つて喜ぶべきである。更に一進して、

表裏一枚

世界の利を圖る者は最上級の實業家

最上級實業家

である。これ世界の利を圖ると一個の利を圖るとが相一致して吾が事業を爲すのが即ち世界の利益であり、世界の利益を圖るのが即ち吾が事業である、とするのであるから尊いこと言ふまでも無い。畢竟大信念大勇氣を有して、

吾が事業を樂んで爲す實業家

人の偉なるもの

が、實業家の中の尊敬欣向すべきものであるといふことに歸着する。千萬金を得るが如きは、貨遷の術を解するもの或は之を能くせん、しかも千萬金を得るも抑亦何かせんで、通貨と煙火は放つ時のみ輝くものである。金錢を得るのを面白しとするが如き境界を超越して、吾が事業を爲すを樂んで、吾が事業に力むる實業家たるに至らば、實業家とのみ云はんや、人の偉なるものといふ可しである。

○一様の資格の階級

同級の感情の超越

類異なれば情亦異なり

禽には禽の情があり、獸には獸の情がある。禽の情は禽の情で、自からにして獸の情とは異なり、獸は獸の情で、自からにして禽の情とは異なる。類の同じものは其の情もまた同じく、類の異なるものは其の情もまた不同である。同類感情は至大な力を有して居るもので、其の約束を破ることは難い。禽にして獸の情を有することも不可能で、獸にして禽の情を有することも不可能である。同類の情は略相同じきものである。其の類のものゝ通有する情を名づけて

類同じければ情相近し

同類感情

といふ。禽の中にも種々の禽がある。渉水鳥もあれば、候鳥もある。家雞

もあれば、山禽もある。鶉の如きものもあれば、鶴の如きものもある。渉水鳥は渉水鳥で通有する情を有し、候鳥は候鳥で通有する情を有する。其の他の種々の禽も亦然りである。是の如く同類のものには其の同種だけに通有する情を具して居る。これを

同種感情

種異なれば情相異なり

といふ。古語に鶏寒うして樹に上り、鴨寒うして水に入る、といふのがあるが、鶏寒うして自から樹に上るところは、即ち鶏一般の通有するところの情であり、鴨寒うして水に入るところは、即ち鴨の通有するところの情である。鴨は寒うして樹に翔上せず、鶏は寒うして水に没入せぬ。

甲乙丙丁の鶏、皆寒うして樹に上るのである。庚辛壬癸の鴨、皆寒うして水に入るのである。同種感情の力もまた甚大なるものである。獸に於けるも、亦然りて、同種感情の力は其々の種を蓋うて居

○同級の感情の超越

三

人として
情の通有感

るのである。
人は人としての通有性の感情を有して居る。禽とも獸とも異なり、
蟲とも魚とも異なつて居る。それは今更めてこゝに言ふを須たない
ことである。同類感情同種感情の大法は到處に行はれて居つて、こ
れによつて一切生物各々其の生を遂げて居るのである。
禽獸蟲魚の事は姑らく擱いて論せずとして、猶一層詳密に人の上
に就て考察して見ると、人には

同齡感情

といふものがある。凡そ同一年齡、若しくは相接近した年齡の者
の感情は、やゝ同じ状態のものである。之に反して甚しく相距りた
る年齡の者の感情は相異なるものである。三四歳の小兒は三四歳の
小兒で、智愚利鈍の別は存するものとして、大抵同じきものであ
り、二十歳前後の者は二十歳前後で同じく、六十歳以上の老人は

年齢の異
情の相異

時代の異
情の相異

六十歳以上の老人で同じ感情を有して居る。六十歳以上の者と二
十歳前後の者とは、おのづからにして其の感情を一にすること能は
ざる勢がある。同齡感情といふものが有つて、三四歳の小兒が歡笑
するところのものは、二十歳前後の者の歡笑するところとならず、
二十歳前後の者の憤慨するところのものが、必らずしも六十歳以上
の者の憤慨するところとはならない。六十歳以上は六十歳以上で、
相互に解しあひ悟りあひするところの感情があり、二十歳前後の者
は二十歳前後の者で相互に通融和諧し得る感情がある。これを同齡
感情といふのである。

是の如き状態を推して考ふる時は、時代は時代で其の時代の通有
の感情がある。室町時代鎌倉時代平安時代、それ々の時代の感情
は、異時代のものとは確に異なつて居る。其時代の通有性の感情を、

同代感情

○同級の感情の超越

處の異
なる感情
の相異

○修 者 論
といふ。明治以前の人の感情は、確に明治以後の人の感情と餘程
異なつて居るに相違無い。此の故に時を以て論ずれば、大にしては
同代感情があり、小にしては同齡感情がある。
處を以て言へば、邦異なれば情異なる状態がある。日本人の感情
は支那人の感情と異なり、歐羅巴人の感情は印度人の感情と異なつ
て居る。其の邦々國々の人々の感情の通有性なるところ、之を

同邦感情

といふ。
同じ邦の内でも薩摩の人の感情と奥州の人の感情とは異に、北越
の人は北越の人で相同じく、南紀の人は南紀の人で相同じき感情が
ある。之を

同郷感情

職業の異
なる感情
の相異

といふ。
職業が同じければ感情は又相同じくなる。士はおのづから士、工
はおのづから工、農はおのづから農、商はおのづから商で、通有性
の感情を有し、船頭は船頭、馬子は馬子の感情を有して居る。之を

同職感情

と云つて非ならずである。大工は大工、左官は左官の情があつて、
おのづからにして自他相異なるものがある。
扱其の同職の中に就て猶仔細に觀察するときは、

同級感情

といふものゝ存在することを認める、之が今言はんとするところ
のものである。
同じ階級にある人、若しくは相接近した階級に在る人は、おのづ

○同級の感情の超越

頭領

職人

日備手間

からにして一様の感情を有するものである。一例を擧ぐれば、大工にしても、左官にしても、其の一團の長となつて居るもの、即ち頭領たり親方たるもの、一列は、其の一列で同型の感情を有して居るものである。又其の頭領たり親方たるものに隸屬して工務に服する者、即ち職人は職人で、おのづから職人通有の感情を有して居るものである。職人等の下にありて補助をなすところの傭人足、手間取などは、又それ等だけの同型の感情を有して居るものである。其の境界が異なり、職責が異なり、接觸するところが異なれば、其の感情の異なるは自然の數である。其の境界が同じく、職責が同じく、接觸するところが同じければ、其の感情の同じやうになるも自然の數である。頭領はいづれも、上は直接に依頼者に對して其の任を負ひ、下は職人手間取等に對して其の務を課し、そして自己の名譽と利益とを保持し發展せんとして居るのである。職人は課せられたる部分だけの責任を果して、そして自から糊口せんとするものである。

同級感情の超脱するの難

同級感情の例

手間取はまた一層職人より低度な任務に就て居るので、また一層檢束するところ少く感情を有して居るのが實際である。

これと同じく、職を官衙に奉じて居るものでも、低級官吏は低級官吏、課長は課長、備吏は備吏、局長は局長、高官は高官で、大凡同階級に屬するものだけの通有性の感情がある。また學を校舍に受くるものでも、初學生は初學生、半熟生は半熟生、卒業に近からんとする者は卒業に近からんとするものだけに、同階級の者だけの通有感情がある。此の同級感情といふものを脱することは甚だ難いもので、先づ十人が十人其の感情を有すればこそ之を同級感情といふものであるから、其の感情の蓋ふところとなるを脱するのは、固より容易では無い。猶其の上に精緻な工作を爲せば爲し得る餘地と時間とが有つても、まづ此位にして置けば宜い、と云ふので、其の儘にして已んで終ふのが、職人の同級感情の一例である。たま／＼精勵勤勉な職人があつて普通一般より深切周到な仕事をすれば、一般

○修 論
同級感情に超えぬ限りは何ともされぬけれども、若し一般の感情に超ゆるほどになれば、必らず妨害も起る位のものである。大抵此位の事をすれば宜いといふ一般の感情があるところへ、其の上の事をすれば一般感情には違ふのである。これはたゞ工務の上だけの事であるが、特に工務の上のみに限らず、其の他の事でもまた然様である。學に従ふものでも然様である。同級感情に順應して居るものは、其の同級中で評判の宜い者である。たま／＼奮勉強を以て罵られたりなどして、同級中より好く云はれぬものがある。それは同級感情に異なるだけ勉強するものである。遊樂に於ても、談論に於ても、趣味に於ても、態度に於ても、同級生中の普通を超えて居るものは、やゝもすれば罵倒され除外されるものである。其の罵倒され除外さるゝを見て、同級感情の有力であり、普通であることを思はるゝのである。

此の同級感情に諧應し調和して行くことは、安全といふことより

云へば安全であるが、平凡といふことより云へば平凡なのである。同級感情に埋没して居れば、即ち可も無く不可も無いのである。同級感情の導者となれば、即ち同級者間の評判の良いものとなるのである。同級感情に超えるか、若くは及ばなければ、嫉妬や猜忌や罵詈雑言や除外を受くるのである。

人に向上心が無ければ已む。若し向上心有れば、低級の者は永久に低級の者であるを肯じない。智識に於ても、官等に於ても、社會に於ける地位に於ても、内證心解の祕密の境界に於ても、一級は一級より高く、一階は一階より上らんとするのが、人の欺くべからず抑ふべからざる本性である。此の向上心ある以上は、此の向上心の發作に適應する態度を自ら保たねばならぬのである。然るに向上心と同級感情との關係は、一寸矛盾的情態を有して居るものである。大工の職工は職工として終らんより、終に一の頭領となつて數多の職工をも使用し、一個の自己の發現たる建築をも遺さんとするのが、

○同級の感情の超越

同級感情
に頭上
進歩無し

○修 省 論

三六

發達上進
する者は
同級感情
を超越す

おのづからの希望であるべきである。ところが同級感情といふことは、碎いて云へば十人並といふことであるから、其の十人並になつて月日を送つて行くといふことは、其の人をして十人並以上にならしむることを少くせしむる所以の數理の攝するところとなるを免れざらしむるものである。若し十人並にして永く満足すれば、職工は終に職工として終らなければならぬのである。學に従ふものは永く凡庸の受賣學者、取次學者として終らなければならぬのである。凡て願ふ者は多く、成るものは少いのである。人の下たる者は多く、上たる者は少いのである。此の因由を思ふに同級感情に囚はれたる結果が、向上を妨げる場合の多いことを認め無い譯にはゆかぬ。世間の發達上進して行く人を觀るに、職業者でも官吏でも、多くは皆同級感情を超越して居る傾のある人である。同級感情に囚はれて、所謂職人根性のみで、徒らに時間の經つことの遅いのを待ち詫び、食時休息と煙草休息との時の來ることをのみ待つて居るやうでは、

同級感情
を超越する
者漸く上
る者とな

同級感情
に頭上
進歩無し

○同級の感情の超越

三七

蓋し一個の頭領となるのは少いことでもあり、遅いことでもあらう。若し夫れ職人根性を超越して、其の頭領に眞に同情して、其の工事の遺憾無く成就せんことを求むるやうで有つたならば、其の職人は必ずや遅かれ速かれ、眼ある者の認むる所となつて、終には仕事を直接に依頼さるゝに至り、一個の頭領となつて地平線に出頭する機會に出會ふべきである。官に在る者、學に従ふ者、皆同じ情狀である。すべて其の自己の屬する階級の、同級感情にのみ囚はるゝといふことは望ましく無い。其の上級者に同情するといふやうにあつたならば、其の仕事は何によらず好結果を得て、そして其の人は漸くにして他の認むるところとなり、自己の屬する階級より頭を抜くに至るであらう。同級感情に驅らるゝ者は、同級者に背馳せぬ代りに、やゝもすれば時に上級者乃至下級者の感情と背馳して、而して背馳せる双方の感情の間の溝渠に墜落するの不幸を生ずるに至ることも有らう。しかし向上心無くば已む、苟も向上心ある以上は必ら

○修 省 論
すしも身みを同級どうきゅう感情かんじやうに徇したがへるには當あたらない、須すべらく同級どうきゅう感情かんじやうを超越てうえつ
すべしである。

得力の處

得力の處が無ければ

學問がくもん技藝ぎげいより世よに處しし事ことに接せつするに至いたるまで、何なににも彼かにも、おのれも悦よろこぶ能あたはず、人もまた認かめぬものである。

筆道の喻
たまく／＼幾百字いくひゃくじを書かくの、未いまだ書しを學まなばざるものゝ字じは、幾百字いくひゃくじ盡つくく拙せつにして、一の佳字かじある無なきは、たとへば石油せきゆの幾百滴いくひゃくてつあるも、滴々てつてつ皆臭みなくさきやうなものである。また既すでに書しを學まなぶに志こころせるも、學まなぶこと猶なほ未いまだ深ふかからざるものゝ字じは、幾百字いくひゃくじ中ちゆう、佳かならざるもの固かたより多おほしと雖いへども、間あひだにまた佳かなるものもあるのである。そこで其そのの佳かなるものを復また書かかすと、此この度もまた能よく佳かなるを得うるかといふに、然さう様ようはゆかぬのであつて、前まへには劣せうつた文字もんじを作なし出だすものである。書しを學まなんで既すでに成なつてゐる老先生らうせんせいになると、其そのの書風しよふうや字體じたいは兎とに角かくに、其そのの人は其そのの人だけの佳趣かじゆをあらはして、字々皆佳じじよみなかな

○得力の處

を處理するにも、得力の處ある人がこれに當つて呉れるのと、得力の處おぼつかない人が當つて呉れるのでは大なる差異がそこに現する譯である。

人の上にあつては、

上に立つ
者と下に
在る者と
の得力の
處

人の得力の處を看取する

ことが最大吃緊の事である。人の下に在つては、何にまれ

得力の處を養ひなす

ことが必要である。

得力の處ある人は、即眞に有用の人なのである。

人の得力の處を看取するといふ上に於て得力の處ある人が、眞に

人の上に立ち得る人である、一城一國の主たるべき器の人である。

人の上
る道

自己の力のみを用ひんとするは、一城一國の主では無い、劍術遣

槍遣、棒遣のやからである。

棒も使へず、槍も使へず、劍も使へぬといふのは、得力の處無き

人の下
る道

ものである。何一つ得力の處も無くて、不平、悪口、饒舌だけに於

て人後に落ちざるもの、如きは、人の上たる道に於て得力の處ある

人に棄てられても致方は無い。

正心誠意

正心誠意
の基礎

といふことは、大切なことでもあり、美しいことでもある。然し
正心誠意といふことが、眞の知の上に成立つので無くして、間違も
無く懸念も無く成立ち得るであらうか。即正心誠意といふことは、
眞の知無くして成立ち得るであらうか。知が十分に無くては意誠心
正といふことは成立ち難くはあるまいか。播種耕耨の事に當る者が
其の知がおぼつかなくては、正心誠意で事に當らうとしても、おの
づから疑惑も有らう、懸念も有らう。すなはち十分に是の如くにし

○得力の處

誠意を以て
光景に當

○ 修 論

て可なり、是の如くなさざる可からずといふ信念を有し得て、そして其の信念を果さんとする十分の意即誠意と、其の信念に自から負かざる心即正心と、を以て事に當り得やうか。危いことある。

誠意を以て事に當るといへば、それで宜しいやうである。然し播種耕耨の事を知らぬ者が播種耕耨の事に當る場合には、誠意が成立し得難い理である。其の人が奸偽狂妄で無くて、真に其の事を善くせんと思ふにしても、實際の衝に當つて、如何にして宜いか分らぬ時は、隅から隅まで充ち渡つた

腹一杯の力

を注いで、或處置をなす事は出来難いのである。すなはち誠意を以ては事に當れぬのである。誠意とは隅から隅まで充ち渡つた歪も撓も無いところの意である。かうすれば宜い、かうし無ければならぬ、火が焼かうが水が漂はさうが、かうしなければならぬ、といふ

透徹した
しき見無
る意誠之

信念に満されて、或は動き或は止まるのが、誠意の状態である。曖昧模糊たるところが一點でも有つては、駁雜の意である、誠意では無いのである、誠意になり得て居らぬのである。俗に所謂「あやふや」なところが有つては誠意が成立し兼ねるのである。大なり小なり、淺なり深なり、徹底したところが無くては誠意は成立し難い。國家の經濟に任ずる者があると假定すれば、其の人にして紙幣を増發するにせよ、回収するにせよ、其の孰を取るにしても、確にかくするが可である、かくせねばならぬといふ信念があつて、そして後に増發、或は回収をするに至り、はじめて其の人が國家に對する誠意を致し得たのである。國家を思ふの心は偽無きにせよ、紙幣の増發と回収とのいづれが可なるか不明確であるながら、すなはち十二分に透徹した意見を有するに至らざるのでありながら、増發若くは回収をするやうでは、其の意は悪では無いけれども、其の意は誠になり得たのでは無い。不安と不健とは何處かに潜んでゐるに疑無い。

○ 得力の處

得力の處
無ければ
誠意なり

○修省論
省みて不安と不健とを有しながら、誠意になり得ることの難いのは、智者を待たずして知るべきである。此の故に事に處し物に接する上に於て得力の處が無くては、誠意で事に處し物に接するといふことは難いのである。

技術や學問に於ての得力の處の有無は、専門にわたることであるから、其の専門に屬せぬ人に對つて之有らんことを求めるのは無理である。然し事に處し物に接する上、すなはち日常一般の事に就ては、何人も多少はあれ、得力の處があるもので無ければ、誠意といふことすら成立たぬのであるから、甚だ以て困るのである。
萬人に通ずるところの日常一般の事に就ての得力の處の無い人ほど、當人も究し、傍人も困るものは無い。吾人は先づ専門分科に於て得力の處あらんことを欲するよりも、日常一般

處事接物の上に於て得力の處

日常喫茶
飯底の
喫るに於て
事力に必要

得力の處
無き光景

が無くてはならぬのである。是の如きは一切の根本となり、基礎となることであるからである。
官廳に在つても、民間に在つても、自から肆塵を開いても、無業無職にして生活して居ても、此の普通の處事接物の上に於て得力の處が無くては、何も彼も不安不確不健不備の上に成立つことになる。其の人が好性質であつても、良氣習を有してゐても、其の人も自から苦まねばならず、自から不安を感じずには居られず、まして其の人の傍の人は其の人の爲に、不安其の他の御裾分を被らねばならず、其の人によつて扱はるゝ事務は、彗星の軌道の不明なるが如くに、不明の徑路を取つて進行し、其の人の營業は、畸人の奇行の如くに施爲され、其の人の生活は春の曉の夢の如くに、又風に飛べる蘆の穂綿の如くに、取留無く營まるゝであらう。
近來は時代の教育の結果として、日常生活に於て得力の處無き代りに、玻璃製の擬造寶石の如く輝く些少の雜智を裝飾とせる者が多

○得力の處

○修 論
元
くなつて、此等の人々は皆自から苦み、自から不安を感じ、其の性質氣習の善良なるものは、正心誠意の境界に立つて言動營爲せんとは願ひながらも、而も心正意誠なる能はざるを憾んでゐる。少々の學問を爲たのみで、何等得力の處の無いものは、

擬造寶石の廻轉飾臺

無き人々
たるに過ぎぬ。是の如き女には、其の夫は生活の伴侶を得ずして、茶呑啻の友を得たるに過ぎざるを歎じ、是の如き男には、其の妻は生活の保護者を得ずして、子種授與職を得たるに過ぎざるを驚き、是の如き人々を任命し備入れたる官衙會社等は、其の得力の處あるに至るまでの間、忍耐して待つを得策とせざる可からざるのである。然も其の傍の者の苦より、其の當人の苦は、實に同情すべき價が大なのである。

日常生活に於て得力の處あるを得るに至るの道は、何様すれば宜

いであらう。これは必らず起るべき問題である。然し此の答は甚だ容易である。たゞ

虚に就かず

虚に就かず
しに参すべ

して實に参すれば、それでよいのである。撥鏡法が何様であるの、藏鋒が何様であるの、露鋒が何様であるの、印々泥、錐畫沙が何様であるの、努、趯、策、掠が何様であるのと思惟したり研究したりするのも、決して愚な事では無い。然しそれは書論の虚に就いてゐるのである。さういふことを飽まで論究考盡するの可である。けれども上は後漢の蔡邕の傳授から、下は清人の王虚舟や梁心舟や最近の楊守敬あたりまでの種々の議論を捏返して見たところで、書に於ての得力の處が得られるか何様であらう。日置流の傳書や小笠原流の傳書は讀んだことも有り、竹林流の講釋を耳にしたこともある。但し自分は弓箭をとつて、百歩の外

○得力の處

に柳葉を射るところでは無い。芭蕉の葉をさへ射得るとは斷言出來ない。悲しいかな全く得力のところが無いからである。たゞ虚に就て聰明を使ひ盡したとて、何の益をか爲さう。趙括の談兵は、説き得て必らず妙であつたらうが、惜むらくは得力の處あるに至らずして戦敗れ兵潰えたのであらう。

須らく實に參して積む程を積む

實に參するとは、虚に就かないで工夫を下すことである。功程を積むことである。張伯英が庭池の水盡く墨なりといふも、智永が敗筆五大甕に滿てりといふも、米元章が一日書せずんば便思の溢るを覺ゆと云つたといふのも、皆是實際の工夫の親切で熱烈で、功程を積むこと海山たゞならざるを謂つたものであらう。一日千射二千射三千射、手に弓無く箭無きも、禽を見れば則ち射るを擬するのが、弓術を學ぶもの、眞の境界である。鍾繇は王羲之と名を齊くした人だが、臥しても被に畫して表に穿過したといふ。是皆實に參するの狀態である。吾人日常生活に於て得力の處の無いのは、全く擬造實

力が是吾師の與ふるものなり

石の購入に忙しくて、知らず識らず趙括の系統となつて居るからである。時代の教育に欺かれてゐるのみで、力は是吾が力、師の與ふるものに非ずといふことを忘れてゐるやうなものである。館屋には教科書も無い。審飴學も無い。たゞ彼は日々に實に參して、そして人の爲す能はざるを爲すに至つたのみである。吾人は吾人生活の實に參して、微々たるにせよ得力の處を做し出すべきである。そして得力の處を做し出すの道の上に於て得力の處あるに至るべきである。

自 遂 の 功 人 の 勇 氣

人の勇氣
の種々

は猶人の智識の如くに、種々の性質もあり、種々の段階もある。一時に亢奮して、敢然として驀直に進み、火に入り水に入るをも辭せず、鋒刃を踏み矢石を冒すをも怖れざるが如きも、勇氣の一である。久年に持續して、泰然として自ら守り、飢寒身に逼れども其の操を改めず、妻子窮を訴ふれども、其の節を變せず、情を矯め志を遂ぐるが如きも、勇氣の一である。暴虎馮河は勇の小なるものであるけれども、此も亦勇氣の一たるを失はぬ。克己復禮は勇の密なるものであつて、此も固より勇氣の一である。凡て是の如く勇氣の性質も種々あるが、其の等級段階も亦おのづからにして一様ならざるものである。然し大處より論ずる時は、種々の性質の勇氣の中、血氣の勇の如きは、人類以下の他動物にもまた存すること、さのみ

生活に
交々
ある
勇氣

勇氣として貴重すべきでも無く、また吾人の實際の生活上、若くは進歩向上の理想の路途上に於て、須要の地を占むるものでも無い。吾人にとつて勇氣の重要なものは、吾人の實際の生活を良好ならしめ、若くは進歩向上の理想の路途上に資するところがある爲で、是の如き二ヶ條、換言すれば現在及將來の生活に喫緊なる交渉ある勇氣をのみ重要とするのである。空虚の名譽や、因襲の惰力や、浮誇の感情や、凡そ其等のものに本づいて發動する勇氣は、勇氣には相違無いが、價値あるものとして重んずるには足らない。たゞ眞の意味に於ての人類の幸福を増進發達せしむる爲に用ゐらるゝ勇氣が重要な勇氣なのである。而して此等の

勇 氣 の 涵 養

は如何にして漸く得らるゝかといふに、それは意見の立場によりて如何様にも解釋され説明され得る。若し夫れ道義の念を主として

○自 遂 の 功

勇氣の
涵養は
何に
より
得ら
るか

○修 論
論ずる時には、眞の勇氣は、道義の念の確立によつて得らるゝとも
説き得る。實際また其の通りである。又健康の體を主として論ずる
時には、眞の勇氣は健康の體の保全によつて得らるゝとも説き得る。
實際もまた其の通りである。然し今最適切なる意志の訓練の側より
して言へば、意志の力を養ふといふことによりて得らるゝとも言ひ
得る。そして日々の實際に近き點よりして云へば、日常の行爲と意
志との關涉の最緊密なる場合に就て説明して、

自期の遂行

を爲すの習慣を積むによりて得らるゝと解釋するのは、甚だ妥當
で、且つ甚だ適切であると信せられる。
漠然として手を着くところの知れぬ言論は、所謂空疎に墮する
の談で、證も無いことである。道義の念の確立といふことも至極好
い。健康の體の保持といふことも至極好い。たゞ道義の念といふが

如き大綱的の大づかみの談は、之を日常の實際行爲に如何に接觸貼
着せしむべきかといふ點に於て、更に綿密に體驗心得するの工夫を
積み重ねばならぬ。又健康の體の保持といふことが、勇氣に取つて大
切な事であることは言ふまでも無いが、たゞ健康の體の保持が、直
接に吾人の生活の幸福の増進に資する勇氣の涵養長育に響くのでは
無い、健康の體の保持の上に、猶或者即或思想や行爲を伴はせて
而して後に有効なのである。それ故に日常の

實に貼いての工夫

から言へば、卑近膚淺のやうではあるが、自期の遂行といふ點に
就て、自ら策勵して日を送る方が、確實に生活と交渉の密なる勇氣
を増進するの道である。言ふまでも無いことであるが、すべて勇氣
は自信より生ずるものである。商業上の勇氣は、商業上の自信より
生じ、工業上の勇氣は、工業上の自信より生ずる。如何に卓絶した

○白途の功

勇氣は自
信より生

勇氣は自信を積む
増長する

○修 會 論
能力を有する人でも、自信の無いところには勇氣は無い。例へば未だ曾て游泳したことの無い人は、河を渡るには勇氣を有し得ず、未だ曾て碁を圍んだことの無い人は、碁に於て人と智を角するの勇氣を有し得ぬが如くである。之に反して如何に劣弱な能力を有するものでも、自信の存するところには勇氣を有し得るものである。例へば山間僻地の小兒が、獨木橋を渡るには、何の畏るゝところ無く、海濱漁夫の小兒が、波濤の間に舟を行くには、何の危むところも無いやうなものである。此の意味から言つて、勇氣は自信を積むによつて増進するゝものと言ひ得る。されば生活に緊密なる交渉を有する勇氣もまた自信によつて生ぜらるゝことは、猶更勿論の事である。そこで商業でも、工業でも、乃至農業でも何でも、何等かの事に従ふ者に取つて、最も有利なる事情は、先づ

自信の堆積

自信の生ずる根本

といふことである。畢竟何程かの経験を敢てして、勝利の事實を收め、そして其の收め得た勝利の事實に依つて自信を強むるといふことが、有益な勇氣の涵養長育の良法である。然らば自信は如何にして堆積し得るかといふに、自期の遂行によつて得られるので、我々の如きことを爲さんと期して其の事の遂行され得たことが一度ならば、一度だけの自信が生じ、二度ならば、二度だけの自信が生じ、三、四、五、六度ならば、三、四、五、六度だけの自信が生ずるのである。些細な一例を挙げむに、たとへば明日よりは毎朝六時に開店して既に客を待つ準備を了し置くべし、と自ら期するとして、其の第一日に自期を遂行し得た時は、明らかに一日分の自信を得たのである。第二日も自期を遂行し得、第三日第四日も自期の如くなるを得、數十日乃至數百日に亘りて自期を遂行するを得たる時は、店主の自信は漸次に堆積され、そして毎日六時に開店する事に就ての勇氣は強盛にして、少々不任意の事情、若くは困難の事情が起ると

○自 途 の 功

爲すある
人として
無き人と
の通有性

○修 論
も、容易に之を突破して、六時開店の例規を維持することが出来るのである。是の如き勇氣の持績が人生に必要なことは言ふ迄も無いが、是の如き勇氣の成立つのは、一には其の店主の性格により、一には實に自期の遂行が重なつて自信の堆積を致し、而して其の自信によつて頑強に支持されて勇氣が威を揮つて居る、と解して差支無い。自期の遂行は、たゞ一時の一事に就て観る時は、然までの重事では無いが、實に人生有用の勇氣の分子若くは原子を爲して居るのである。世の爲すある人を觀るに、其の人の才器天分が卓出して居るのに本づくといふよりは、自期の遂行といふ習慣を積んで居るのに本づくと言つた方が正鵠を得て居ると考へらるゝのが多い。又實に自期の遂行を敢てせざる人が、昨日も自期を遂行せず、今日も自期を遂行せずといふやうにして、歲月を経てゐるのは、畢竟人生に有益なる効果を殘さずに終る人の通有性だと言へる。故に自期の遂行といふことは、如何なる

三

些事にも重大なる價值

習慣の價

を附する事である。如何となれば習慣は、其の事柄の價よりも、習慣の價として尊いのであつて、習慣の成ると成らぬとは、些事を疎にせぬと疎にするのとより生ずるからである。吾人は如何なる小事に於ても、必らず自期を遂行すべきである。而して自期を遂行するの習慣を成し、此の習慣によつて自信を強くし、此の自信によつて有益なる勇氣を保有するものとなるべきである。決して自期を遂行せぬ習慣を作る可からざるものである。自期の不遂行は、自信力を潰爛し、自信力の潰爛は、勇氣の涸竭を致すからである。然し吾人は數々自期を遂行し得ざることに遭遇する。是亦人生の常態である。けれども詳しく觀察して、其の不遂行の原因が意志の薄弱にのみ基づくならば、自から鞭撻して更正すべきであるは勿論であるが、時には

○自 途 の 功

三

自期す可からざるを自期す

る爲に、自期の不遂行を生ずることがある、然れいふ場合には、自期す可からざるを自期するが如きことを爲さず、根本に於て無理の無い、必らず自期し得べきことを自期するが宜いのである。自期す可からざるを自期して、而して自期不遂行の習慣を造るが如きは、甚しく不利益な事で、そして墮落卑屈の原因となるものである。世の失敗者の多数を観察するに、自期す可からざるを自期するに本づいて、自期不遂行の習慣をなしたのに累せられて居るものが少くない。是大に留心す可きことである。

自期不遂
行の習慣
は墮落の
原因とな
る

微生物の如き生滅

微菌

微生物の生
滅盛衰

は其の發生蕃殖するに當つては、實に驚くべき速度を以て、自己一族の勢力を擴張し、繁榮を持續し、他體を侵蝕して、自己の發展の資料とする。然れども其の發展展開にして或程度に達するや、自己の體軀より排出する敗殘物質と、一族の死屍殘骸とに圍繞せられて、其の困窮するところとなり、別に清新の營生資料を得るの路を見出さざる時は、終に衰耗敗滅するに至るものである。

社會に於ける個人と其の事業との榮枯も、また此に類似することがある。或人が或場合に於て崛起する時、若くは新しく或事業を経営する時は、はじめ外間に於て之を危ぶむに關せず、随分意外に其の人が發達したり、其の事業が展開するものであるが、さて其ならば、年月を経るに隨つて愈々發達展開して行くかといふに、然様は

○微生物の如き生滅

ならないで、或程度に達した後は却つて衰耗したり、縮小したりするものが多い。其の事情と理由とを何故であるかと考察すると、恰も微菌の生活の如くなる場合が甚だ多い。

自己が店舗を開きて、直接に營業に従事し、或は工場を有して直接に事業に従つて居る人でも、或は又多數の使用人等を有して、自己はたゞ其の管理のみを爲すにせよ、或時期を経過する時は、必然の勢として、

自己の周圍に自己を圍繞する者

自己を圍繞する者
 が出来る。其の自己を圍繞する者が出来た時は、即や、衰耗縮小に傾かんとして居る時であつて、他人を圍繞して、之に阿付するところの其等の者は、言はゞ其の人の事業を翼賛して居るものには相違無いが、換言すれば此等の人は、中心の人若くは事業と、他の社會の間との障壁となつて終つて、中心の人若くは事業と社會とを隔

て、個人に取つては其の聰明を壅蔽し、事業に取つては其の事業と社會との交渉を稀薄ならしむる傾がある。本来ならば此等の圍繞者は、個人若くは事業と、他の個人及び社會との間に立つて、兩者を連結する電線電話線となり、又は水管瓦斯管となり、兩者を親近密接せしむる機能をあらはして宜い譯であるが、實際に於ては却つて兩者を疎隔し、面々相見ゆること少からしむる傾があり、兩者の間には障子となつて終ふ状況がある。

試に之を今少しく具體的に説けば、一人あつて稍々社會に於て成功しかけたる人となる、其の使用人若くは親近者の中に於て、其の人の信任を得たる者が、自然と其の人を圍繞する状態となり、又稍々成功に近づける者は、身邊の事端が漸々に増加する者であるから、勢として自己一身三面六臂ならざる以上は、親近者を自己の部理代人として、自己に代つて或方面に當らしむるやうになる。然様すると、今までは自己の眼見耳聞と、口談心思とを以つて、顧客な

手代事務員

他體の脂肪に衣食する者

○修 會 論

らば顧客、事業ならば事業に、直接に接觸して来た者が、所謂手代事務員等をして衝に當らしむるやうになる。此等の手代事務員等は、勿論其のベストを盡して事に當るには相違無いが、元來他人の使用するところとなる者と、他人を使用するに至る程の人物との間には、最初から手腕に差があり、頭腦も差があるのであるから、何様しても主人公自身が局に當るほどの働が出来ぬのは自然の數である。そして時に或は必らずしも其のベストを盡すに恪ならざるにあらざる事情も生起せぬことを保し難いし、それで無いにしても此等の人員は、月々年々、何程かづゝの給料等を得て、其主人若くは其の事業の會社の脂肪に衣食して行くのである。されば主人側より之を観察すれば、主人自身には頭腦も手腕も及ばざる者を代理者として用ゐる不利の上に、給料支給等の不利を忍び、而して又必らずしも誠實なるのみなりとは信じ難き不安の不利を忍ばねばならぬのである。こゝに於て、其の經營するところの事業にして、順潮順風なる時は、

半程以上成功して驀に墮す

是の如き不利あるも、猶且利益を生じ行くべきであるが、一朝にして時利あらず、若くは時利あるも其の利を生ずるの力甚だ微少なるの機に遭遇する際は、使用人は定額俸給を受くるも、主人は不利を受取らざるを得ざるの狀に陥る。其の場合、恰も微菌が稍々盛大に蕃殖したるが爲に、自己の廢殘物に圍繞されて、自己に有利の資料を得るに難くなつた、と同様の状態の如くなるのである。此の如き状態で、稍々成功しかけたる商業者や工業者、乃至種々の事業の經營者は、過半程以上の成功の曉、即相當の發達を遂げた曉に於て、一時は不如意不利益の狀態に置かるゝのが世上の常である。

繁茂せぬ盆栽の植物は、却つて安全であるけれども、枝葉繁茂した盆栽植物は、梢枯や裾廢を起して、枯死に近づぐが如く、餘り發達せぬものは、却つて安全であるけれども、急速に發達した者が、却つて其の個人の利益が増進し、事業の範圍が増長した曉に於て、悲況に陥ることは、世に其の實例の甚だ多きことである。又或事業

○微菌の如き生涯

○修 論
などでも、發達の遅々たるものは、却つて安全であるけれども、稍成功の緒に就きて、生産機關の増加された場合などには、却つて自己の生産力の増加の爲めに、生産過剰の不利を受けて、恰も微菌が自己の生成した敗殘物に苦むが如き状態を生ずることも珍しく無い。製鹽業の如き、若し一年中無間斷に有力なる方法を以て食鹽を産出する時は、明らかに自己産出の物の爲に自己が苦まねばならぬ結果に陥るのである。さればと云つて、退嬰自損は、今日の吾人の理想とすることは出来ぬが、微菌的生滅を取るのには、個人にとつても、一團の事業にとつても、悦ぶ可からざることである。戦争に勝を得て發達したのは宜い。然し自己が做し出した軍費の繼續を餘儀無くされて、自己の爲し出した事の爲に、自己が苦むなどは感心しない。何様しても別に清新の營生資料を得るの活路をば見出さねばならぬ。一個人、一會社、一國の榮枯、其の理は別に異つたことは無い。

根本に對する培養

美花碩果

を求むるの道は、決して一樣では無い。花に就て之を求むれば、花の数を少くすることが、其の一法である。自然が齎した花の数を摘み去りて、花の数を少くすれば、同一量の養分が少數の花に向つて供給さるゝの故を以て、其の花は多量の養分の供給を受け、そしておのづから豊艶偉大の花を開くことになる。これと同じ理で、果に就て之を求むれば、果の数を少くすることも、碩果を求むるの一法である。又接穂をしたり、取木をしたり、他體の良好の性質や能力を採り入るゝことも、一方法である。又特別の設計によつて、空氣の溫度を好適にしたり、電氣作用を與へたりするのも一方法である。又枝を洗し葉を除き、害虫を去り、風霜を防ぐ等、飽迄人為的保護の精を盡すのも、一方法である。然し此等の諸種の方法あるに

○修省論
關はらず、其の最良方法はと問は、

根本培養

に在りと答へざるを得ないであらう。如何となれば花数を少くし、果数を減ずるが如き、其の他の種々の方法の如きも、畢竟皆根本培養が十分であつての上ならば有効であらうが、然無き時は盡く無効に属すべきであるからである。根本の培養が植物に取つて重要なものは、柝甲發芽の初より、凌霄參天の盛に至るまで、終始變らざるもので、其の他の一切の事は、たゞ此の一事の成立つての後の事である。此と同じく、

人事の百般は

實に際限無く紛々として居るけれども、而も其の部門部門に、根本の培養と目すべきことが存して居つて、其の部門部門の取除く可

一切の處
置の根本

人事の難
を收め
る原因
の核心

からざる樞機を爲して居るを疑は無い。然し植物の根本を見出して、此が培養を爲すことは、自から明らかな事で、且又おのづからにして做し得ることであるが、他の人事に在つては、其の那邊の處が根本で、そして此を如何に培養すべきかを見出すことは、自明な事でも無ければ、容易な事でも無い。否、寧ろ人事の功を收め難い原因の核心は、此の根本を見出し難きと、其の培養の道を得難きとに本づくとも云つても宜いので有らう。

一例を言つて見るならば、國家の經濟財政の如きも、其の根本は那邊であらう、又培養は如何にしたら宜いのだらう。是の如きは學者に在つては、各々信するところが有らうけれども、而も局に當るものは迷ふ道理で、植物の根本及び其の培養を明知善解せるが如くには、知解し難いかの觀がある。國家の經濟を論じたらば、其の根本たるべきものは人民であらうか。其の一切の根基となりて、生産力ある點より觀察すれば、根本は人民たるを疑はぬ。しかし植物に

國家の經
濟の根本

○根本に對する培養

○修省論
於ける根本培養の道は知れて居るが、

經濟上に於ける根本

天然界の
明確なる
確界

の人民を養ふの道は、如何にすれば至當なのであらう。租税を薄くするの道も一であらう。教育を普及させるのも一であらう。保護税の法を布くのも其の一であらう。各種奨励法を布くのも其の一であらう。然し植物界に於ける栽培法の如くに、國家經濟に於ける施設を如何にする時は眞に可なるや、といふことは明確でない。又一小例を挙げようならば、一商店の商業の如きも其である。一人の商業の繁榮を致すべき道としての根本培養に相當すること、之を具象的に説明したならば何事であらう。これも各人各様の解釋や信條が存在するには相違無いが、要するに農圃の事に於けるが如く明白では有るまい。顧客の信用が根本であるとも解せられる。顧客の便利が根本であるとも解せられる。商品を潤澤にすることが

農圃に於ける
明確なる
確界

根本の培養とも考へられる。商品の精選といふことが商業根本の培養であるとも考へられる。如何にも多様の解釋を容れ得るのである。植物の根本は一瞥して見出し得るが、人事の根本に相當するところのものは、然様容易には見定められぬのである。そこで若し眞に眞の根本たるべきところの事を見出して、眞に能く之を培養し得たならば、其の人は確に漸次に好收穫を得るのであらうが、根本なりと思考しても、しかも眞の根本ならぬところに、力を竭して培養的の施設を爲すものならば、其の人は明かに失敗を招致するのであらう。是の如くに觀察すれば、

根本培養といふ一語は

甚だ明白で、そして間然す可からざる黄金律ではあるが、之を實際に當嵌めて具象的に解せんとする段になると、岐路甚だ多くして、迷謬に陥り易いことである。世上幾多の聰明の人々が、志と事と違

○根本に對する培養

人事の眞の根本

○修 音 論
ひ、命と身と仇を爲すに至るのも、蓋し事業の根本と思考するところ
ろが眞を得ざるに本づいて居ることが多いからであらう。相當の思
慮ある以上は、何人が根本培養の必要なることを知らずに居らう。
しかも終に根本培養の結果、枝葉繁茂して、碩果累々たるの好光景
を現出することが、世に甚だ少きをおもへば、根本培養といふ黄金
律も、其の實際のところは能く理解すること少いと見える。先
づ努力して見出す可きは、各人關係の人事の眞の根本といふところ
で、そして其の眞の根本といふところを如何にして培養すべきかと
いふことを研究することであらう。

生産力及生産者

人 界

社會の成立

は相互の扶持によつて成立つて居る。既に單獨圓滿といふ事が現
成せぬに定まつて居る人間ではあるが、猶圓滿を需めるのが人間の
已み難き慾求である。そこで自分も人の爲にする代り、人にも自分
の爲になつて貰ひ、所謂相互扶持の情狀によりて、圓滿を得ようと
するものが、人間の常態で、そして其の意味から、言はず語らずの間
に、社會といふものが成立ち、又其の意味が都合好く遂げられぬ點
から、社會状態の變化といふことが惹起さるのである。是の如く
であるから、社會及び社會状態といふものは、生活の圓滿を欲する
人間の慾求を其の存在の根柢として居るもので、其の意義を簡單に
言明すれば、相互扶持といふを外にしては、他に切切な言語も無い
のである。此故に

社會状態の變化

○生産力及生産者

社會は社會全部の爲の社會

社會の偏
頗状態

で、或一部の種族や階級や職業や資格に屬する者の爲の社會で無
 いことは自明の理である。然し或歴史や或自然状態や或信仰の爲に、
 此の自明の理が掩蔽されて、社會が社會全部の爲の社會にはあらざ
 るが如き觀を生じて、しかも其の社會の人々に怪まれざりしが如き
 ことも無かつたでは無い。古の印度に於て階級思想の社會を蓋うて
 居た時は、農工の民や漁屠の民は、婆羅門族や刹帝利族に比して、
 如何に不利な地に居たことであらう。又我が日本に於ても、明治以
 前までは、社會は恰も帶刀者の爲の社會であつたかの如くであつた。
 又源平氏以前に於ては、社會は恰も搦手者の爲の社會であつたかの
 如くであつた。革命前の佛國の如き、社會は王室と貴族との爲の社
 會なるが如くであつたのである。但し是の如き偏頗な状態は、一方
 に利するだけ一方に利せぬのであるから、決して永續す可き理は無

い。其の不利を受くる方面から反動の火は擧げられて、そして其の

社會の狀態の變化

社會の偏
頗の更正

は惹起さるゝのである。最も柔順な印度人民の間でも、階級思想
 は先づ佛敎の平等思想に反抗され、そして何時とは無しに婆羅門族
 も然のみ威を揮ふに及ば無くなつた。佛國に於ける慘楚な出來事は、
 王族や貴族を其の輝ける高き壇上より引下して、そして共和政治の
 成立は、平民を快活なる芝生の上に置くに至つた。我が邦に於ては、
 搦手者流のみが幸福を擅にした長い時代の後に、武士の一族が之に
 代つて、武力の所有者が社會に於て好地位を占めてゐた。然し明治
 以後、武力の所有者が有して居た社會上の地位は奪はれて、財力の
 所有者が社會に於て好地位を占む可きかの如き勢は、漸くにして今
 日に現はれかゝつて居る。社會は實に社會の爲の社會であるに疑無
 いことは、譬へば水は實に水平である可きに疑無きが如くである。

水平なる
べき水

水平なら
多き水

〇修言論
然し社會がやゝもすれば社會の一部分なる或種族や或階級や或職業に屬する者などの爲の社會なるが如く偏倚するの状あることは、譬へば水がやゝもすれば水平を保たずして、其の表面に、小にしては細連微漪、大にしては狂瀾怒濤を有し勝なるが如くである。これも亦人智の揣摩のみにては測り難き、如何ともしがたき人の世の狀態である。是の如くにして古よりの歴史は、恆に社會が社會の爲の社會になり得ずして、何等かの不公平を爲して居ることを示して居る。

今日の社會

は著しく前代の社會よりは改善されて居る。王族や、貴族や、僧侶や、爲政者や、武士や、其等の或者が社會に特別地位を有して、社會は恰も其等の爲の社會であるかの如き觀を呈するといふやうな、そんな舊弊は既に洗滌されて居る。然し物質文明、特に力學上の各般の施設經營といふことは、甚しく

資本に利益

個人能力
の權威の
削減

資本の權
威の増長

を與へて個人の能力の權威を削減した。電力や蒸氣力に本づく種の機械力が、紡績をも、鍛冶をも、製材をも、精米をも、何をも彼をも爲すに及んでは、個人の能力の權威が前代に比して低落したことは争ふ可くも無いし、又資本の權威が前代に比して擴張されたことも争ふ可くも無いものがある。編物製作器械の出來ぬ間は、服でも應でも編物は人の手で編まれなければならなかつたし、レース製作器械が出来るまでは、必らず人の手でレースは造られたのであるから、過去に於ては、編物やレースに對しては、工女の工技は、實に不可抗の權威を有して居たものである。然し之を製造する器械が案出されて、然のみ工技無き者でも、器械の把手を執りさへすれば、需むるところの物を造り出し得るやうになつては、工女の工技が有して居た權威はおのづからにして力を失ひ、器械を購入した資本と

〇生産力及生産者

いふものゝ權威のみが力を振ふやうになつて來て居る。そこで社會は何時よりも無く、資本者に幸する所多くして、工技ある個人に利するところ少きやうになり、一轉しては資本者の爲の社會のやうな状態をさへ現すに至つてゐる。古の如くに僧侶や貴族が、或特權を有すると云ふことは無くなつた代りに、資本といふものは恐るべき猛威を揮ひはじめ、個人の價値が著し、低下せしめられた其の結果として、活きた人間の權威は言はぬ黄白の下に屈從せしめらるるが如き状態が世に現はれて來た。政治の運用、及び法律の制定をなす者等は、資本者の側に立つて居る。随つて政治及び法律は、個人の權威を確立保證するよりも、資本の權威を確立し保證するに傾いて居る。資本無き人の個々の力を代表する者は議院に少いが、資本の力は手は議員を造り出し、且つ其の議員によつて資本家は議院に代表せられるのみならず、時に或は議員を操縦し得る。若夫資本無くして、たゞ單に技能を有するのみの者は、制定せられたる法律に

服従するの義務を負ふのみにして、殆ど法律の制定には容喙するの權利無く、施爲せらるゝ政治に頼るのみにして、政治の施爲には殆ど預らず、常に資本といふ大光明の爲に、朽木の光の何等の權威無きが如き状態に陥つて居る。是の如きが今日の状態である。扱又一國一國の状態を離れて、

世界全體の形勢

を觀ても、資本の潤澤な國は資本の乏少な國を凌ぐことが甚しい。交通機關の發達が今日の如くにならなかつた以前は、千里も二千里も隔つた國の資本の力が、何も影響を及ぼしは仕無かつたのであるが、交通の容易と迅速とが加はつた結果として、世界は縮小したるが如き觀を生じ、英國や佛國の資本の威力が、東亞や南阿に緊密に差響くのである。で、綿は印度の地に産するに相違無いが、資本は英吉利の資本が働く結果として、綿が紡がれて絲となり、織られて

○修 音 論
布となり、布が衣となる末に至るまでの間に生ずる農利工商利は皆英吉利の資本に吸収されることになつて、そして資本者は優秀な地位を占め、無資本者は不利益な發達し難い位置に立たせられて居る。南阿の開拓でも、支那の鑛業其他でも、皆同じことである。

世界は資本者の爲の世界

であつて、無資本者の爲の世界では無きが如く見える。今後若し電力の送達方法が愈々進歩して、非常の長距離にも容易に傳送し得るやうになつたならば、資本の威力は更に何程か其の猛勢を揮ふことであらう。然無くとも資本の多少が農工業の經營の利不利に比例することは、明白の理であるのに加へて、資本は那處にも放下し得るのであるから、四海漸く合して一水とならんとするが如き今日以後の世に在つては、社會が資本者に恵むことは實に深厚であつて、資本者は飽迄も自己を便利好都合の地に置き得、無資本者は不便利

今後の社
會と資本

資本家の
有する便
宜は國境
を超越す

不都合の境に甘んぜねばならぬ勢が成立つて居る。些々たる一事例を擧ぐれば、水力電氣の價格の如き、アルプス山附近に於ては、一馬力一年が五圓より十圓、那威の西海岸のオッダでは、一馬力一年四圓、ノトーデン附近にては六圓、米國ナイアガラにては二十四圓乃至四十圓を普通とするが、日本の我が現在では、一年一馬力實に一百餘圓である。同一時間の同一力量が、數倍乃至十倍二十倍三十倍では餘り其の差が大なるに過ぎるから、若國家に對する愛や、郷土に對する執着が無いとすれば、營まんとする事業の種類によつては、電力の高價な自國に投資して事業を企つるより、電力の低廉な外國に在つて資本を放下した方が利益になる。それも自國が弱くて他國が強い場合には懸念無きにあらずであるが、自國が優秀で、資本放下に適した事情を有する他國が自國より劣弱な場合には、萬々一の面倒な場合にも不利益を得て終ることは無いから、其邊を見越して國外に投資するの勇氣と便利とを資本家は有し得るのである。

○生産力及生産者

是の如き事情よりして、優秀を占むる國の資本家は、弱國或は未開國に投資するの利益を得、弱國或は未開國の民人は、資本家の都合次第に、使役され、或は閉却さるゝの位置に立つのである。地形が與ふる利、地殼が有する富、日光の力や、空氣の力の與ふる恩恵、此等の總てのものが、今はたゞ資本家の手にのみ落ちて、そして其の醇處佳處を資本家の取るに任せて居るのである。古は人と地とは密着したもので、其の地が與ふる天の恩恵は、其の地の民の所有であつて、そして其の恩恵は移動し難かつたのであるが、今日は物質學的文明の進歩の結果、地と人とが密着する力よりも、資本と天の福惠との密着する力の方が強くなつて、個人は物質文明に壓迫され、資本は物質文明に左袒さるゝの勢が成立つて居るのである。英國企業家の意見によれば、アイスランドに於ては資本をさへ投ずれば一年一馬力の水電を僅々一圓を以て得べき見込の地もあるといふでは無いか。一年一馬力百何十圓を價する國が、一年一馬力一圓を以て

天の惠福
と其の地
の民との
密着

天の惠福
と資本と
の密着

使用し得る資本團と競争して、何の工業にもせよ、勝ち得るか勝ち得ぬかは、識者を待たずして明らかなることである。資本さへ潤澤にあれば國外の天恵をさへ隨意に使用し能ふけれども、資本が無ければ吾が國內の天恵をさへ資本者に吸収されて終ふのが、今日の世界の狀態である。まして個人の福利の如きは實に資本によつて保持されて居るが如き狀態を呈して居るのが今の社會の現狀で、畢竟

資本を以て王に代へたる專制政治

が行はれて居るのである。無資本者は資本家が工場に使役したり、農圃の小作人にしたたり爲て呉れるので、辛くもそれによつて生活を扶持されて居るといふ様なものが、今日の實狀である。今を古に比すれば、今の資本者は古の王なのである。今の社會の個人は古の專制國治下の民なのである。古の專制國主と今の資本者との差は、たゞ劍を以てすると貨幣を以てするとだけである。大は世界の趨勢より、

劍と貨幣
との異の
み

今利資本家の學問は、古の利爲の宗如し。

○修者論
小は一國內一地方内の實狀に至るまで、皆此の專制政治は行はれて居るのである。資本の力が法律を作り政治を動かす、そして政治法律が資本の力を増長させる。科學の力はまた恰も古の宗教が君主に利益した如くに、今の資本の力ある者に利益する。是の如き馬鹿馬鹿しい事は有る可き譯はない。社會は社會の社會だ。個人は資本の奴隷たるに甘んずべきでは無い。

古の輪廻轉生の説

は、王者や貴族には甚だ好都合であつた。十善を修めた者が王となり、此よりも少い善を修めた者が貴族になつて、過去の善の報を受け、又善を修めずして惡を爲した者が賤者貧者と生れて、此の世に於て前世の債を償ふといふことが信せらるれば、賤民は貴者に反抗すべからざる者の如く定められ、貴者は賤者に對して債權者たるが如き位置に立つことになるのである。現世の階級を過去の作業の

階級儼存の思想

結果と觀做せば、現世に於て高地位に生れて來た者は、犯す可からざる者であり、又低地位に生れて來た者は如何ともす可からざる者であるから、終局のところ、階級は儼存し、平等は撥無され、王者や貴族は安穩に繁榮し、確實に幸福を受ける譯である。是の如き情狀に於て、輪廻轉生を説く宗教は、社會の優等者を庇護するに傾き、劣等者を壓迫するに傾き、一切衆生に於て吾子の觀をなすべき筈のものが、右に於ては吾子の觀を做し、左に於ては繼子の觀を做して、偏頗な處置を取るに至つて居る。佛教の因果應報の教は甚だ妙であるが、平等を標榜しながら差別の儼立をなすやうになつて居たのが舊時の實際である。
羅馬法皇の勢威の隆盛な時代の

基督教

も、また平民や賤者には其の慈光を投げ惠風を吹かせては居無か

○生産力及生産者

神威を背
景として
優者を偏
愛せる宗
教

○修省論
つた。神の威靈を其の冠に頂いて、國王や貴族や富者に對して社會に於ける安定の地位を得せしめたものは、其の教應であつた。宇宙の主宰者たる神の代理人の如き態度を取つて世に對し、榮耀を有する者、黄金を有する者をして、神威の餘澤を被つて、生きては社會に雄視し、死しては天堂に入るを得せしめた者は、其教應であつた。回々教々徒が天堂の扉を開く鍵は劍であつたが、當時の基督教徒の天堂の扉を開く鍵は黄金であつた。帝王や貴族は、神の寵命を受けて、特別の權威を以て衆庶に臨むべきものとされて居たのである。斯の如くにして宗教も社會の優勝者にのみ其の祝福を取つて居た。是の如くに人間以上の威力を背景として有せる宗教が、社會の優者に偏頗な愛を注いで、普通の民庶を壓迫したのは、古の事であつたが、

宗教と社會の上層者との結合

以民爲本
の大義の
光輝

して居た間は随分長いことであつた。宗教は既に衰へ、若くは更新し、帝王神權の説は漸く光を失ひ、輪廻轉生の説は信を惹かざるに至つて、恰も政治上には以民爲本の大義が其の光輝を揚ぐるに際したので、王者や貴族の勢威は世に薄らぎ、宗教もまた此の特別關係を拋棄したかの如く見えるに至つた。かく過去に於て宗教が有力者に對して或利益を與へたる如く、今日に於て

科學は資本者に利益

科學は宇
宙の無情
支配者

すること夥しい。古の宗教は宇宙の有情的支配者たる神を背後に負つて社會の優者に其の威を借し、今の科學は宇宙の無情的の支配者たる理といふものを頭上に戴いて、有資本者に其の力を提供して居る。科學の力の恐ろしいことは、其の實際生活に應用さるゝに當つて、怪腕を伸ばして個人の職務を奪ふことである。世の進歩せざる時代に於ては、人皆手脚のみを用ゐて事を做し務

○生産力及生産者

〇修者論
に當つて居たのである。やゝ進んでは鋸や犁や紡車や鋸の如き道具を用ゐるに及んだのである。しかし愈々進んで、科學の力より組立てられた複雑なる設計や、機關や、動力が生ずるに及んでは、道具さへ廢せらるゝに近くなつて居るのだから、まして人の手脚の力などは、數にもならぬものになつて居るのである。で、大資本によつて經營運轉さるゝ生産事業に對して、道具を使つて微々たる仕事をすることは、競争にも何にもならぬ。ジャカード式の織機が働くの對して、手機は如何にして競争し得よう。巧緻なる紡績機械が恐ろしい動力によつて動かさるゝに對して、古の紡車が何として競ひ得よう。ターバイン式の機關によつて進む船に對して、手漕の船が何として競ひ得よう。大は鐵器の製造や、運輸機關や、軍事上の各種の事より、小は音曲の復現や、烹灸の些事に至るまで、科學の力の與ふる進歩や變化は、皆必らず個人の力量や技能を侵蝕して、資本に對するだけの結果を正比例的に現はすのである。

こゝに於て「人」といふものゝ社會上に有して居た價値は日に月に減じて、「資本が變形した設備」といふものゝ社會上に占むる價値は日に月に増して行きつゝあるのである。人耕は馬耕牛耕に及ばず、馬耕牛耕は蒸氣耕に及ばず、自動車は犁を振つて規則正しく且つ深い畝を圃上に作つて行く世となつて居るのである。最も人力を要する農業までが、人力を要する事少く、資本力に頼るの勝れるを思ふやうになつて居るのである。まして工業などは、漸次に「人力を驅逐若くは減損して行かんとする」のが今日の工業の進歩及び變化の方針だと云つても宜い位である。そこで直接に生産の事に當る者よりも、間接に生産の事に當る者、即資本者の方が、實際に於て有力であり、且利益の收入者として立つて至當な者であるといふ事に歸着する。紡績の工女は、日々綿屑を浴びて労働するも、其の労働の價値は甚だ低く、資本者たる其の會社の株主の提供した株金の所爲の價値は甚だ高いことになる。而して社會は此に對して不平を言ふ

〇生産力及生産者

個人と資本の力

○修 省 論
べき理も無く、又勿論正當として之を認めなければならぬ事となつて居る。其の状は恰も宗教が威力を有して居た時代に於て、社會の下級に生れた貧賤者は、飽までも其の不自由と困難とを、先天の命運として甘受せねばならぬと定められ、而して王者や貴族は、おのづからにして幸福尊貴の状を享有す可き者として認められたと同じ様な事である。
こゝに考慮すべき事は、資本といふ者が一度堆積さるゝ時は、其の

資本より生ずる利益は級數的に繼續

して行くことである。そして個人及び技能より生ずる者は、假令病氣其他の事情が無くとも、級數的には結果を生ずるに至らぬといふことである。根本的に是の如きの差あるが上に、個人及び技能は、禍災、年齢、病氣、事故等の理由を以て、同一状態を

個人と資本の係

持續すること難く、數々豫定より功力を缺損するの事情を生ずることである。換言すれば貸したる金は雪が降つても雨が降つても七分なら七分の利子を生ずるが、個人が道を歩む力は雪が降り雨が降れば分減を生ずるといふことである。此の理によつて資本者側は年々月々に其の幸福を伸張し得るが、無資本にして個人力のみ資本とする者は、或年或月には其の幸福を缺損するに際會するを免れぬ數理上の大勢があるといふことである。

生産力は資本に比例す

るのを今日の常とし、生産者には比例せぬに至つた。前代に於ては之に反して、生産力は生産者に比例し、資本には比例せぬのであつた。否、生産力は資本及び生産者の結合に比例するものであることは、變ふ可からざるの眞理であり眞事實であるが、資本と生産者との那方が主となり那方が賓となるかといふことを考へると、科學

○生産力及生産者

が生産界に
が主たる人
世たる人

○修 省 論
の力の未だ十分に發達せずして、世に精巧緻密の大装置なる機械の
成立つに至らざりし間、即個々の生産者が簡單なる道具を使用して
何事かを爲して居た間は、生産者の方が主となり、資本の方が賓と
なつて居たのである。然し今日の如くに個人の肢體の力を生産力の
中心となさずして、電力や汽力を一切の中心となして、そして精巧
緻密の機械の成立つに至つては、資本の方が主になつて、生産者の
方が賓となるに及んで居る。機關が巧緻を益せば益すほど、此に従
事する者の技術の要は減少されるのであつて、何人を以ても代ふる
ことが出来るやうになるのである。古の紡車を以て糸を抽き出すに
は、相應の手心の技巧を要するのであつて、無經驗なる者が事に従
つたからとて、思ふやうに糸は抽けぬのである。それであるから糸
を抽く技術ある人が、糸を抽くといふことの中心になつて居るので
あつて、金さへ有れば直に購ひ得る紡車等に對する者、即資本とい
ふものは、然るまで主要の地には立つて居らぬのである。是の如き事

が生産界に
が主たる人
世たる人

情の世には、

生産力は生産者に比例

して居るのであつて、生産者の向背は生産力に至大の關係を有し、
生産力の死命は生産者に制されて居るのである。然るに科學の力を
後楯にした精巧緻密の大装置が成立つに及んでは、紡績の工女はた
だ其の機關の助手たるが如き地位に立つに止まり、古の紡車に對し
て糸を抽きたる女が其の紡車の主人たる地位を有して居たのには異
りて、機關の前の隷屬たるが如き地位に甘んせざるを得ざるに至つ
て居る。即工女の有する價値は比較的甚だ低いものであつて、甲
の女にして此に従事せざる時は、何時にても此に代りて従事すべき
乙丙丁等の女子を得るに苦まぬのであるから、容易に其の代を得べ
き者の價は低い。經濟上の道理に照されて、如何にしても古の紡車
の前の女子の如き地位には立難くなつてゐるのである。紡績のみで

○生産力及生産者

生産の中心の移動

各般の発達の威力的増進

○修省論

は無、各般の生産業に於て、今日皆是の如き事情があつて、之に従事する者は、少数の技師等を除いては、職工女等皆甚だ價値の低い者となつて居る。此の事は生産業に於て必須とする動力の變革——即古は多く動物力を調節して用ゐ、今は多く自然力に加工して用ゐることが其の原因の一となり、又個人の技巧を精緻の機械の作業に遷すことの成功、——即無生物をして活物の能力範圍に侵入せしめ得たることが其の原因の二となり、自然力及び無生物に對しては甚だ有力なる資本の威力を揮はしむると同時に、一面に於ては個人の有して居た價値を著しく低下せしめたのである。茲に於て生産界に於ける資本の威力は非常に増進したが、猶今後各般の發明が爲遂げらるゝ度毎に、蓋し資本の威力は愈増進し、そして反比例的に生産に關係せる個人の地位は低下せしめらるゝことであらう。換言すれば直接に生産の事に當る多數の人々は、漸々に其の地位を低下されて、資本は漸々に其の威力を張るに至るであらう。

う。が、これ果して社會に取つて眞の幸福を齎らすに足ることであらうか、非耶。

古の政治の宗と資本の學との壓迫と

然し科學の進歩と智識の應用とが、徒らに資本の威力を張らしむるに止まつて多數の農工業者の地位を卑うするに過ぎざる場合、吾人は社會の上層者に利便を與ふるに偏した前代の宗教を前代の下層者が不問に附したやうに、今に於て科學の進歩と智識の應用とを不問に附さうとは思はぬ。是の如き社會狀態の結果が如何なる事に立到るだらうかといふことを考へずには居られぬ。古の人民は政治及び宗教の壓迫に苦しんだ。今後の人民は資本及び科學の壓迫に苦しむるであらう。古の人民は政治上の壓迫に對して終に民權説を唱へ出し、そして政治上の状態は一變化を遂ぐるに至つた。今後の人民は資本の壓迫に對して終に何等かの意見を提出せすに已むで有らうか。そして社會上の状態は或變化を遂げず、長く資本者は愈威を張り、多數の生産者は濠の埋草となつて已むであらうか。王政でも

○生産力及生産者

政治に於ける民衆の思想

社會に於ける人々の思想

今日の社會の大勢

ツラストと生産者

○ 修者論

帝政でも共和政でも、政治は「以民爲本」の大道に負く可くは無い。政治上に於ては以民爲本の大道が柄として今日に輝いて居る。社會は同じく「以人爲本」の大道に負くべくは無い。「以王爲本」の思想は政治上に於ては最良思想では無い。王政といへども其の最良の王政は猶且以民爲本である。社會に於て「以資爲本」の狀態が盛行しては、其の社會は危険に近づいて居る。社會上には飽までも、人を以て本とするの思想が體現されねばならぬ。單に資本の威力をのみ張らしむるに至つては、政治上に於て單に尊貴の威力をのみ張つた結果として、民衆の厭惡憎疾の念が激烈に尊貴に對して注がれて、そして暴兇な革命が惹起されたるが如く、社會上に於ては所謂社會主義の如き各種の危険思想が惹起するを免れぬのである。然し生産界に於ては、事功を尙ぶの餘に、資本を尊び、資本者を尊ぶに傾くを免れず、又今日の科學智識應用の結果の大勢として、資本者に利することは多く、労働者に利することは薄い餘に、以資爲本の、

狀態が現はれんとして居るのを悲まねばならぬ。社會は社會の爲の社會であるが、しかも今日の社會は資本者の爲の社會であるが如き状態を現はさんとして居る。實に善處し難き世の一過渡期である。況んやまた資本者は資本者側の利益を安定鞏固にせんが爲に、ツラスト組織などを試みるに至つて居るが、若しそれ眞に理想的にツラスト組織などが成立つ時は、職工労働者の輩、即直接に生産の事に従ひ務に當る者は、皆其の周到なる箱籠を受けて、資本者の命惟従はざるを得ざるに至るのである。たゞにツラストの爲に需用者が高價に物品の供給を受けるに至るのみでは無い。社會は愈々以資爲本の状態となりて、人を以て本と爲すの大道には負くに至り、怨嗟不平の聲は漸く高く響くに至らう。堰けば溢るゝは水の情である、壓さるれば逆り飛ぶは人の心である。資本の壓力の加るゝのが労働者等に嚴しく自覺されぬ間は差支も無いが、若し夫強烈なる壓迫が自己等の頭上に加へらるゝことを自覺して、而して其の苦の堪へ難きを感じるに

○ 生産力及生産者

至つては、爆發せずして已むであらうか、實に考慮に價することである。

是の如き事が一國內のみに終ることならば、猶調和と融解との餘地を存し得るかも知れ無い。同一國語を語り、同一歴史を有し、糺して見れば親族關係や姻戚關係が網の如く連なつて居る民族同士の間ならば、利害に就て相争ふ随分險惡の状態の時になつても、猶或は美しい讓歩や麗はしい解釋やが成立ち得るのであるが、國語も異り、歴史も異り、風俗習慣も何も彼も異つて、そして史上には争鬭關係が有つたり、それで無いにしても全く無關係であつたりするとこの甲乙兩國の間に、利害から生ずる面倒な葛藤が起つた場合には、何様して調和と融解とが得られよう。しかも國內同士には斟酌も遠慮も有勝であるが、他國同士には何の斟酌も遠慮も有る譯は無い、却つて無遠慮無斟酌を以て、進化の大法の下に行はるゝ淘汰の嚴規として然る可きことゝ信じて任意に振舞ふから其の壓迫の相及

他國同士の社會的關係

外國の資本より被る壓迫

ぶ段に至つては實に双方共に相忍ばざるあるに至るのである。甲の國の資本の力が乙の國の生産者を壓迫する一例を語らうならば、某大陸國の小麥粉製造業の莫大なる資本と、廣大なる農穫との結合の結果が、某島國の小麥粉製造者の、小き挽磨を挽きて日々少許の小麥粉を得る生計を奪去つた其の事實の如きは、一適證である。實に日本の小麥粉製造に従事して居たものは、漸次に其の職業を奪はれたでは無いか。又日本の河内木綿の如きも漸次に木綿や印度綿の爲に、其の生産を少くさるゝでは無いか。外國の金巾製造業は、日本の木綿製造業を壓し去つて居るでは無いか。

國と國との關係

は猶個人と個人との關係の如くであるが、個人と個人との關係、其の相對狀態が最近に接着しても居り、其の相對物件が最小に限局されても居るところから、相互の感情の映射が鋭敏である故に、猛

○生産力及生産者

國と國との
相対状態
は甚だ諷
刺的

異人種、
異宗教、
異言語、
異習慣

○修者論

烈な憎悪の念に燃ゆる事も有らうが、しかも多くの場合に於ては自然の人情として、苛酷猛烈な所爲には出難いのを常とするに反し、國と國とでは、其の相対状態は甚だ疎濶であり、其の相対物件は餘りに廣く、限局が無いのであるから、自然の人情といふやうな意味の湧くべきところが無い、従つて只管双方が打算的に冷静にのみなつて、利害相争ふ段になれば終には苛酷猛烈な所爲にも及ばんとするの傾がある。況んや之に加ふるに異人種異宗教異言語異習慣といふ相互の反撥的感情を以てするに於てをやで、國と國との關係は到底個人と個人との關係の如くに斟酌あり推譲ある温和の状態を保つを得ぬのである。

で、甲國の人と乙國の人とが利害の點に於て競争若くは衝突するのは猶可なるも、甲國と乙國とが競争若くは衝突するに至つては、恐怖す可き慘毒の出来事も生ぜぬとは限らぬ。それで無くとも、個人と個人との間のやうな情合は之を國と國との間に於て需む可から

黃禍説

ざることが自然の勢であるから、相互が敢然として無斟酌無遠慮になる上に、相互の國民が國民として愛國的感情に燃ゆる時は、一歩たりとも一尺たりとも、自國を利せんことを思ひ、他國に後れざらんことを欲する餘に、其の競争や衝突は激烈を極むるに至るべき勢がある。彼の黃禍説の如きも、兵事以上以外に於ては、此等の點の豫想に本づいて居る憂虞の發表であり、環國主義やモンロー主義や保護政策なども、根を洗つて見れば皆國と國との競争衝突の豫想に本づいて居る憂虞の發表である。兵事や政治上の事は姑く擱くとしても生産界に於ての

國と國との競争衝突

は、畢竟するに兵事や政治上の葛藤紛紜の根原となるもので、これに根ざす兵事政治の争闘は、最も根柢深きものとして、他の諸原因より生ずる國交の艱難よりも艱難の程度の高いものである。綿

兵事や
政治上の
葛藤紛紜
の根原

○生産力及生産者

他國の同業者を壓迫するの念

鐵類及織物、石炭、機械、毛織物、輸出、英國、諸國、居る諸國

○修省論

や小麦の例を引いたが、實に米國の農夫や製粉業者や棉花栽培者が、何を斟酌顧慮してか他國の麥作農夫や製粉業者や棉花栽培者を壓迫することゝを憚らうか。たゞに之を憚らざるのみならず實に其の肚裏に於ては、他國の同業者を壓迫し殲滅せんと欲するの念に燃えて居ても別に酷議すべきでは無い。米利堅粉の布袋を他國のあらゆる土地に行渡らせて、其の國の小麦農業及び製粉業を日に月に衰退させ、米利堅粉を以て其の國の民の口腹を充たして遣ふことは、實に米國の小麦農夫及び製粉業者の勝利として祝すべき事なのである。棉花に於てもまた其の通りである。牛酪を輸出し、石油を輸出し、歐羅巴及亞細亞の諸國に對して誇つて居る米國は、猶愈其の勢を發展し、若くは保留せんと力めてゐるのである。鐵類及び鐵製品を輸出し、石炭、毛織物、機械類を輸出して誇つて居る英國は、此等の物品を産出することに於て他國を壓するを力めて居るのである。絹絲、絹製品、及び銅等を産出するに於て、日本は他邦に劣らざらむと力め

各我を立てて他國を壓迫する

絹絲、絹製品、絹絲、絹製品、絹絲、絹製品

○生産力及生産者

て居るのである。およそ此等の産出物に就て、此等の國々は、他國を壓倒することを差控ふるものではない。皆各我を立てて他を壓せんことを祈求して居るのである。實に米國小麥農夫及び製粉業者は、他國の同業者を壓倒し殲滅せんとして居るのである。鐵類及鐵製品に於ては、英國の該業者は他邦の該業者を壓殺せんことを欲して居るのである。假令該業者等にして右の如き意識無しとするも、自然の結果は其の然るを致すやうになつて居るのである。絹絲及絹製品、茶等に於ては、日本は餘國に劣らざらんことを欲して居るのである。然し絹絲等に於ては佛蘭西、伊太利等と競争衝突を敢てして之に克た無ければならぬ運命を有し、茶に於ては印度、支那と競争衝突を敢てして勝たねばならぬのである。およそ此等の生産の業に従ふ國民にして、若し眞に熱烈なる愛國心に燃ゆる時は、自國の産業の進歩及び確立を希求するより、然るべき道を取りて他國の同業者を壓倒し去らんとするは無理ならぬ希望にして、是の如き希望を非とす

べき理は那處にも無いのである。そこで新に開け興つて来た獨乙な
 ら獨乙といふ國が、鐵器器械類の産出に於て英國と相争はんとする
 の勢を有するに至つたと假定する時は、英國の該業者と獨國の該業
 者とは、眞實及び策略の上に於て互に鎗を削つて戦ひ、實質や價格
 や技術や産額の上に相劣らざらんことを力めて、非常に慘澹たる

平和の争闘

を繼續するのである。但し此の争闘は相互に善良で且正当なこと
 であり、其の結果は世界の進歩を促成するものであるから、一毫も
 之を非とすべき點無きと共に、却て之を懲慝すべき位のものである。
 が、此の争闘の勝負を決す可き理由の多々あるが中に於て最も有力
 なる一條件が「資本」であるといふことは深く注意せねばならぬ。
 個人と個人との格闘の勝敗の決するに至る多數の因由の中に、「腕力」
 が主要部を占むるが如く、國家と國家との戦争の勝敗の決するに至

最も有力
 なる一條件

非善惡
 なる力超越せ

破壞製の
 物品に類
 する人宗
 道に似たる

る因由の中に、「兵力」が主要部を占むるが如く、此の平和の争闘に
 就ては、「資力」が勝敗を決する因由中に主要部を占めて居る。腕力
 は非善惡を超越して之を鞋下の泥土とする。兵力もまた正邪善惡
 を蹂躪して之を靴の下の土とする。これと同じく資本の力もまた正
 邪の善惡だの是非だのといふ其等の條件よりは遙に有力なもので
 あつて、其の魔王の手の如き多力敏捷なる勳は對敵を屈せしむるに
 餘有るものであり、其の義理を超越し人情を超越せる偉大なる脚跟
 下には、人道だとか宗教だとかいふが如き玻璃製の物品に似たる美
 麗にして脆弱なる物は忽地にして踏破し蹴碎さるゝを免れざるほど
 の猛威あるものである。資本の力が是の如き猛威あるものであるこ
 とは、十二分に注意を値することであつて、社會の幸福を築成する
 か破砕するかの方の作用を爲すにせよ、決して之を等閑に看過す
 ることは出来ぬものである。前に説ける如く科學の應用は資本者に
 利益を貽り、資本は科學の應用によつて日に月に其の勢威を張らん

○生産力及生産者

日本にも
小麦は出
ない譯
で來ない

○修 音 論
として居るのが今日の状態である。百萬圓の資本を以て、絹リボン製造を爲すと、五百萬圓の資本を以て同じ製造業を爲すとは、五百萬圓の資本を以て事に従つたもの、方が、必ず生産費を少くし得るか、製品を優良ならしめ得るかに相違無い。五千萬圓の資本より成る鐵工場と、二億圓の資本より成る鐵工場とは、大資本の工場の方が廉價に精品を製出し易い理がある。日本にも小麦が出来ぬのでは無く、小麦粉を製するの器具が無いのでもないけれど、大資本を以て整理され經營されて居る大農場、大規模で大動力大器械により産出さるゝ大製粉場が無く、箱庭の如き小農圃、手挽同様の製粉場から産出さるゝ小麦粉では、何様も米國の小麦粉には勝ち難い譯である。そこで米利堅粉は日本中に横行し、其の囊は到る處に姿を見せて居る。何も日本人民が愛國心無き譯も無く、特に米利堅粉を謳歌する譯も愛好する譯も無いけれど、米利堅粉は低廉な價で優良な質を有して居るから之を購ふので、見す／＼日本の小麦農業及び

權兵衛八
兵衛皆米
利堅粉

製粉業は此が爲に壓倒さるゝとは知りながらも、權兵衛八兵衛皆米利堅粉を購ひて之を食ふのである。即ち

資本の力は他の諸種のもの靴の下の土にする

のである。罪も何も無いけれども日本の小麦農業者及び製粉業者は、其の壓迫を被つて壓殺さるべき位置に立たせられて居るのである。何も強ひて日本の農夫及び製粉業者を苦め且殺さうといふ意志がある譯では無いが、科學の智の應用に結びつけられた資本の力は、太平洋を渡つて來て、其の魔王の魔力ある手を伸べて居るのである。此と同じ道理で、日本の紡績業は、支那の舊式紡車で糸を抽き出して居る田舎の老婆を壓迫し壓殺して居るだらうが、其の代りにまた印度の茶業者は年々に日本の茶業者を苦むるに至り、佛蘭西や伊太利の絹絲及絹絲製品は日本の該業者を苦むるに至つて居るであらう。

○生産力及生産者

科學の應用の
結核の力
に資ける

米國テキサス州其他の農業作キ

日本産の米より二割三割の低價を以て

○修省論

三

此等の事は今日は猶吾人をして痛痒を感せしむることが深厚で無いけれども、やがて日に月に各種の農業工業等あらゆる生産界の事に互つて吾人をして一喜一憂せしむること深厚なるに至ることであらう。

假に一例を擧げて説かう。米國テキサス州其他の米作農業が、科學の精到なる研究及び試験に結び付いたる莫大なる資本によつて經營されるゝとして、幾干日月の實驗の後、人を勞すること少く、費を要すること薄く、そして廣潤な農場に恐しい器械耕耨が成功し、水は旱濕の虞無く適度に與へられ、虫害等は絶無を保たれ、有功肥料は潤澤に施され、收穫乾燥等の處理は敏速有理に施され、品質優良な米が取り上げらるゝとする。そして大資本を以て巧妙に經營された結果として、其の米が日本に輸入されて猶日本産の米より二割三割の低價を以て販賣されたらば何様である。斯の如き事は將來に於て必有の事實であると推論する事も出来ぬが、また敢て是の如き事

日本の農業は今の猶程くて紡車を以て挽く如き

は必無であると斷言する事も出来ぬのである。味の精麤は別問題として、外國産米は日本産米より低廉なるを常として居る。小國と大陸と、耕耘の精疎、おのづから大に異なるものあるよりの事には相違無いが、いづくんぞ知らん他日米國産米の大低廉の價を以て日本に鬻がるゝの日無きことを、若し二割三割低價に鬻がるゝに至つては、日本の米作農業は、又小麦農業や棉花農業の如く衰退に歸せしめらるゝ事無しとも言へぬのである。若も然様いふ場合に達着したらば、我が邦人は抑何とするであらう。日本の農業は今猶紡車を以て糸を挽くが如き程度に止まつて居る。飽迄も個人の筋力及び技能経験を單位にして居るのである。僅々粗代農具代肥料代牛馬を資本とする位の簡單なる事で經營されて居るので、多額の資本を投じ資力の猛威を揮はしめて經營するやうな農業を敢てしたならば、米作も餘程猶經濟的に爲し得るを疑は無い。米國などで米作を敢てしだしたら随分日本國は打撃を被らう。これ猶國內に於て無資力者

○生産力及生産者

三九

一知半解
の社會主義

資本の力
は他國の力
天恵を
吾が用
として
使用する

○修者論

が漸々に資本力の壓迫を被つて究地に陥ると同じことである。米國を恨まうやうも憎まうやうも無いけれども、然様な状態が生じて來ては、實に如何とし難い。國內で無資力者が資本の壓迫に對して、一知半解的の社會主義の如き感情や思想を發して居る間は猶宜いが、國外の資本の壓迫を被るに至つては、手厳しい焦眉の問題になつて來る。是の如き事が無からうと思ふのは間違である、米利堅粉の糞が日本中に行渡つて居るのを見ても考へられるでは無いか。國內の資本に壓迫さるゝさへ、資本者で無い生産者に取つては苦痛であるに、國外の資本に壓迫さるゝに至つては、其の苦言ふ可からざるものあるに至るであらう。しかも資本の威力は、國家の權威が染め分ける世界地圖上の區劃の中に穩和しく爲て居るやうな弱い者では無い、資本の力は他國の天恵をさへ吾が用として使ふに至つて居るものであることは前に述べた通りである。

資力を中心とせず

人を中心として考察

農業工業
は皆薄利
な日本

して見たら何様である。我が日本國の人口は一方哩平均三百三十六人である。是の如き多數の人口を一方哩中に包含するのである上に、農業工業は皆薄利な日本であり、明治以降の世態變化の結果として富者は愈富み、貧者は愈貧に、中等階級の者は漸々減少し行くのであるから、資力の壓迫を感じる者が漸く多くなり、其の感が漸く深厚なるに至るのは無理も無い事で、人情にも道理にも達せぬ傲慢者の口から危険思想など罵らるゝ一種の思想が起つて來るのも、數理上免れ難きことである。國體を無視し、皇室に至情を捧ぐることを忘るゝやうな狂妄な思想こそ我邦に取つての危険思想であれ、資力の壓迫に對して、個人の自體を保たんとするに本づく思想や感情が何の危険思想であらう。科學の智識の恩寵を擅にして、資力の猛威を揮はんとする者こそ危険思想の抱持者ではあるまいか。世界

○生産力及生産者

危険思想
の抱持者

三十人の
ところへ
三百三十
六人

怨嗟嘆息
の聲が一つ
づつ熱汗が
居るが第一
口居るが先
の汗居るが
口居るが先

我國の十
倍の土地
が一日の
土産に
てはが
宜し
理ては
宜し
有し
人我
の十

資本は
不可抗の
神聖なる
思想者
の神
聖なる
思想者
の神

○修省論

の土地を五千五百萬方哩として、人口を十六億とすれば、一方哩に三十人の容れらるべき譯になる。一方哩に三十人が容れらるべきところへ三百三十六人割込んで居るのである。そして地の産物や天の恵光が多いといふのでも無い我邦である。苦しいのは當然である。之に加ふるに資力を有する者が幅を利かして居るのである。譬へば四人入るべき劇場の一格内に八人も十人も押込められて居る、其中で布袋太りの奴が幾人か居るといふやうなものである。怨嗟歎息の聲が先づ第一に熱がつて汗をかいて居る者の口から洩れるのも無理は無いで無いか。我が邦は是の如く一方哩に三百三十六人押詰められて居るのに、北米合衆國は何様だ。一方哩二十六人にしか相當せぬといふでは無いか。それで有るに關らず米國は猶布哇を収めたり、南洋に手を出したり、斟酌も顧慮も無く爲さんと欲するところを爲して居るのである。我邦は十五萬方哩で、人口は五千二百萬である。人を中心として考へる思想、すなはち世界を人の爲の世界

として考へる思想、世界は人類全體の所有であると考へる思想、人を除外せずして人を大切にする思想から割出して見ると、我が邦の人口を容るゝには、百七十三萬方哩、すなはち我國の十一倍ほどの土地を我が日本人は所有して宜い數理である。然も日本人は苦んで狭い中に入つて居るのである。人を貴ぶ思想、人より以外のものは何も人には及ばぬとする思想から言へば、我國の十一倍の土地は我國の人の爲に使つて宜い譯である。けれども

資を中心として考へる思想

すなはち世界を財貨の支配する世界として考へる思想、世界は資力ある者の所有で、人類全體の所有では無いと考へる思想、人を除外して物を考へる思想、人を大切にせぬ思想、資本は不可抗の神聖な者として考ふる思想から割出して見ると、我が邦の如き借財國、貧乏國、無資本國、利息獻上國、水呑國は、折角骨を折つて國の權

○生産力及生産者

日本など
は黙つて
引込んで
いるが宜
い

資本は認
めざるは
何等の價
値なき

○修省論

威を扶植し滿洲やなんぞの世話をするのさへ奢侈の沙汰かも知れぬ。資本を貴ぶ思想、資本の有る者が何によらず爲すべきものである。資本の無い者は引退つて居るが至當だとする思想から言へば、合衆國や英國や佛國は猶何程でも手を擴げて土地を取り國を取るべきである。日本などは黙つて引込んでゐるが宜い譯である。科學知識と結合した資本の威力を揮つて、世界の土地の到る處に其の資本を植ゑて、而して生産力を之に伴はせて發達させ、そして資本が無くて生産者のみの居る貧國弱國を壓迫して、其の産業を蹂躪し、其の人民を苦境に擠し、富める國の文明の華やかなる燈火の爲の油とし、自己等が美しき室を暖むる暖爐の燃料となすべく經營するが、以資本の思想から言へば差支無いのである。然し社會は社會の社會だ、世界は世界の世界だ。資本が何だ。資本といふ者は、人が認めてやるから其の力があるのだ、認めてやらなければ何の價値も無いものだ。吾人は資本に對する思想を根柢より新にす可き時に達して居る

資本を中
心とする
か人間を
中心とする

のである。資本を中心とするか、人間を中心とするか。生産力すなはち生産するといふ事功を大切な事として考ふべきか、生産者、すなはち生産にたづさはる人間を大切に考ふべきか。人の情より論ずれば、人を貴ぶが當然である。數の理より論ずれば、社會は社會の爲の社會である、資本者の爲の社會では無いのである。たゞし世の態から論ずれば、科學智識は資本と結合して、資本は愈其の猛威を揮ふべき勢を成して居るのである。國內、國外、資本者、生産者、二重複雑の關係、人間も貴ばざる可からず、事功も貴ばざる可からず、科學智識は後退すべくも無く、人道の實現は甚だ望無く、世界は畢に大なる坩堝に入らざる可からざる時に臨んで居る。

○生産力及生産者

附

錄

○ 修 省 論

三